
俺こそが名脇役！

ふっしー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺こそが名脇役！

【NZコード】

N7768Y

【作者名】

ふつしー

【あらすじ】

恋愛に憧れる高校生、里美公太はなんと今年に入つてすでに告白四連敗中。それも決まって「あなたは違う」と言われてしまう。告白失敗に呆然とする公太の前に突如現れた黒い巫女服の美少女。彼女の名前は朱夏。縁結びの神を奉る巫女だという。朱夏が語りだした公太の告白失敗の理由。それはなんと公太の主人公時間が無くなつたことが原因だった。主人公時間とは、文字通り人生の間で人が主人公になつていられる時間。人生の主人公から降ろされた公太は一度と恋愛が出来ない体になつてしまつっていたのだ。だが、主人公

に戻る方法が一つだけ存在すると朱夏は語る。その方法とは『他者の物語に脇役として登場する』こと。脇役が他の主人公にとって、重要な存在となり人気者になれば、 спинオフとして主人公に返り咲けることがあるというのだ。この話を聞いた公太は、巫女の朱夏、親友の優と共に、主人公に戻るために脇役として他の主人公の恋愛のサポートを行うことになった！ 脇役視点で物語を描くドタバタ学園ラブコメディー！

プロローグ

「俺と　付き合つてください……！」

……ふふふ……、完璧だ……！！

金曜日の放課後。

一週間の中で最も気の緩むこの時間帯に、俺こと里美公太れとみじゅうたは人生の中で最も緊張していた。

静まり返った屋上で、思春期の男女が一人きりで向かい合つている。

聞こえるのは、風の音と微かな生徒の声と、そして俺の心臓の鼓動。

神々しくも切なく輝く夕日をバックに、俺は目の前の彼女に告白した。

了承を得るために差し出した右手。

角度、スピード、タイミング。まるで計算し尽くしたかの如くしなやかな動き！

それに加えて俺の表情。

恐怖、期待、緊張、その全てに堪え、必死に真剣な顔を作り出す。俺は本気との意思表示を視線で行う！

さぞかし爽やかで、誠実な印象を与えたことだろう！

彼女の表情はどうだ！？　見てみろ！　頬が赤らんでいるではないか！

これも俺が今まで実行してきた作戦の賜物だと言えよう！　それはもう苦労したんだ！

出会いからこの告白まで、俺は様々な手を尽くした！

彼女の情報を得て、周囲の人間関係に根を回し！　同情を誘い味方を作った！

彼女の両親から姉妹、親友に至るまで！　クラスの皆からも応援

された！

屋上に彼女を誘つたとき、クラス中から黄色い悲鳴が飛び交つた！
その時の彼女は、恥ずかしそうにしながらも、期待するような視線をこちらに送つてきたほどだ！

俺、そしてクラスの誰もが、新たなカップルの誕生を確信していた！

そしてこの告白… これで断る女子なんているはずもない…！
恥らう彼女。いやあ、焦らしてくれるぜ…！

しばらくすると、彼女はおずおずと口を開いた。

彼女の第一声。それは栄光の告白了承に違いないのだ！

「あ、答えてくれ…！」

「『めんなさい。あなたじゃないの』

うんうん。そうだわ、そうだわ。こんな雰囲気の中、断る女子なんて

「え…！？」

落ち着け、俺。何かの聞き間違いだ。そうだ、そうに違いない。

「『ごめん！ よく聞こえなかつた… もつ一度お願ひ…』

… 今度こそ、しっかりと聞くぞ…！… さあ、もう一度…！…

「ごめんなさい。あなたは違うから…」

ふふん。そうね。やっぱり聞き間違いじゃなかつた… つて。

「ええ…？ エエエー————！？ ど、どうして…？」

「『めんなさい…。さよなら』

俺の言葉を完璧に無視し、彼女は俺に田もくれず屋上から走り去つて行つた。

後にはポツンと俺一人。

「… 何故だ…？ こんな馬鹿なことが…！？」

まさかの告白拒否。完全に想定外だ…。

「あ、ありえないぞ…？ 一体何が起つたというんだ…？」

告白する前の彼女は誰が見たってOKだった。それなのに一体どうして！？

「俺、何か間違っていたのか！？ 知らないうちに彼女の嫌がるようなことを……？」

いや、それはないはずだ！ 彼女の性格、思想、趣向、人間関係や家族構成に至るまで徹底的に研究し、彼女の目を惹き、好みそうな行動をしていたんだ。

地雷を踏むようなことは決してなかつたはず！

「なのに、どうしてこうなった……」

……あれ？

俺はしばらく考えて、一つ気になることを思い出していた。確かに以前にもこんなことがあったよ'つな。……。あれは確か……前回の告白のときも……。

数ヶ月前

「俺と付き合つてください！！」

「ごめん、あんたじゃないから」

「なんですよ――――――！？」

……つてことがあつたよ'つな。

「デジヤヴ、なのか……？」

そういうえば最近はよく女の子に振られる。

昔の俺は、言つては何だがモテモテだったんだ。

常に彼女はいたし、別れてもすぐに違う彼女が出来たつてもんだ。そんな俺が、今はこの有様だ。告白しても実らない。盛者必衰つてか？ やかましい！

今年に入つて、なんと4連敗中。しかも全部決まって

『あなたじゃないの』

と言われて断られている。流行つてゐるのか……？

「あー、また振られたか……」

ともあれ振られてしまつたものは仕方ないよね。
「まあいや！ 次の恋を探そう！」

と口にして決意を固めた その時だった。

「 あなたには、もひ無理よ 」

俺しかいなのはずの屋上に、ビニからともなく凜とした声が響き渡つた。

「だ、誰だ！？」

驚いた俺は声のした方へと振り向く。屋上の給水タンクの上にその姿はあつた。

「あ、あんた誰だ！？ 一体そこで何してるんだ……！？ ……つ

て、委員長！？」

どんな展開！？ なんで委員長があんなところに！？

俺は驚愕を隠しきれなかつた。その見覚えのある彼女の名は縁朱えにしづ夏。

我がクラスの委員長で、活発な性格と、美麗な外見で、クラスどころか学校中から人気を集めているアイドルなのだ。

だが、その彼女が何故か巫女さんスタイルでそこに立つていたのだ！！

それだけではない！ 特筆すべきはその巫女服！

真っ黒な巫女服だつて！？ そんな巫女服、見たことないぞ！？
「なんで巫女さん！？ しかも黒だと！？ ……いや、今それはどうでもいい！？」

どうでもいいわけないけどね。実はすぐ一気になつてゐる。
「委員長、今のセリフ、一体どうこうことだー」

「その答えは どうつーーー！」

「 ……飛んだだとうーーー！」

委員長は得意げに給水タンクの上からジャンプした！

「あ、危ないってーーー！」

と、俺は注意したものの、黒巫女服をはためかせ空を躍る姿はとても美しく、つい見とれてしまっていた。……のだが

「…………」

予想通りとこうべきか、着地失敗。

「あひやー…………。あれば痛い…………」

委員長はしづらべ悶絶していたが、俺の視線に気づき、わっと立ち上がりこひりに向き直った。

「やり直しよ！」

「…………何を…………？」

「あなたには、もう無理よ…………」

おお、今こけたことを完璧になかったことにしている……。なんてスルースキルだ！

…………って言つてゐる場合じゃないよね。

「なあ、委員長。それってどうこいつことだ？」

「あなたには、もう無理なのよ…………」（ナリナシ）

「…………」

…………マジで最初からやせぬのかよ…………。

「…………」

「…………」（ウルシ）

こや、そんな涙目にならなくて……。どれだけ恥ずかしかったんだよ…………。

仕方ない、少しだけ付き合つてやるか…………。

「なんで巫女わんー？ しかも黒だとー？…………こや、今それはどうでもいい！ 委員長、今のセリフ、一体どうこいつことだー？」

…………でセリフ合つてたよね？

「どいつもこいつも、あなたはもう一度恋愛することができないって。そう言つてゐるのよ」

あつけらかんと言い放つ巫女わん。いや、委員長。セリフは合つてたみたい。

バックには夕日。正直、絵になるよなあ。……着地に成功してい

ればもうと凄かつたのだろうけどね。

……いや、違うだろ俺！

今、とんでもない事を言われたぞ！？俺はもう一度恋愛が出来ないって！？

「あなたはもう一生恋愛することが出来ない」

「一生って……。もしかして死ぬまで？」

「そ。死ぬまで」

言い切られた！？納得いかんぞ！？

「なんでだよ！どうしてお前にそんなことが分かるんだ！？」

「見えるのよ。私には」

薄つすらと笑みを浮かべる巫女さん。瞳には涙が浮かんでるけど。やつぱり痛かっただなあ……。

でも全力で耐えている。口に打った場所をちょいちょい気にする姿が実に可愛らしい。

黒巫女服も間近で見ると迫力あるね。うん。とても似合つてる。しかも良いにおいがするし！

ショートヘアも意外と巫女服とマッチしてるし。

薄つすらと膨らむ胸も……うん。これがまあまあかな……

察しよひ。

思わず顔を緩めてしまつ俺。しょうがないよ。だつて可愛いんだもん。

……つて俺はこんなときに何考へてるんだー。今はそれどころじゃないだろ！？

でも可愛いデヘヘ。

「つてこと」

「…………フオオオオオ…………」（葛藤中）

「ねえ、ちゃんと聞いてるの？」

「もちろんさー！」

嘘です。半分くらい聞いてませんでした。

「そう。じゃあ話を続けるわね。それで私には人の“主人公時間”

を見ることが出来る能力があるの」

「へー、見ることが出来るんだー。すげいねー。」

「…………って主人公時間って何よ！？」

「主人公時間っていうのは、文字通り人生の間で主人公になつていつられる時間のこと。主人公時間は誰もが持つていて、その間はとにかく異性にモテるの。でもあなたはその主人公時間を」

「な、なんとなく次のセリフが分かるぞ。もの凄く嫌な予感。

「全部使い切つてしまつたの」

「なんだって…………？」

予想通りすぎるーーー！今までモテモテだったのはそういう理由だつたのか！？

…………って、おいおい待て待て落ち着け俺。まだ慌てる様な時間じゃない。

いくら可愛いとはいえ、このこの巫女さんの言つこと信じるつてのか？ そんなオカルト無理があるぞ？

「…………なあ、その主人公時間って、本当にあるのか？」

「あるわよ。現実にあなた、たつた今振られていたじゃない」

「なぬ！？ お主、見ていたと申すか！？」

「ええ、惜しかつたわね。主人公時間中だつたら、間違いなくお似合いのカップルになつていたでしょうに」

チクショーつ！ やつぱりそうだつたのか！ お似合いのカップルだつたなんて……。なんてこつたい！

「ちなみに、過去3回全部見てたわ」

「なんだつて…………！」 (二回目)

なんかストーカーまがいだな！ でも可愛いから許しちゃう不思議！！

…………一度目の絶叫。さつきから叫んでばかりだな俺！ 喉痛い……。

「それに全てこう言われてたでしょ？ 『あなたは違う』ってね」

「何故それを！？」

図星だつた。過去全て例外なくそういう言われていたのだ。

「これはね。あなたは主人公とは違つて、そういう意味なのよ？
ヒロインはいつだつて主人公と恋実るものでしょ？」

そうか。だから今まで同じセリフで振られたわけね！　なるほど、
納得！！

「……するわけがなかうー！　すると俺はもう一生恋愛が出来ないってのか！？」

「……なあ、どうにかなる方法はないのか？」

俺はすがりつくような田線を委員長に向ける。

「ないわ」

「即答！？」

視線すら合わせてくれない！？　血も涙もねーのか！？

「……ダメだ……。もう死のう……」

「……と、言いたいところだけど、……つて、聞いてる？」

委員長が何か言つてたみたいだけど、俺はすでに現実から逃避していた。

「もうダメなのー！　一生童貞なんて、ボクには耐えられないのー！」

「あのー、もしもし？」

「もうボクに構わないで！　もつ決めたのー！　死ぬのー！　飛び降りるのよー！」

「…………」（イラッ）

「いやあー！　止めないで！　ボクを止めないでえー！」

「…………いい加減にしない」と一生童貞にするわよ？

「すんませんふざけすぎましたゆるしてください」

一気に現実に戻されたぜ……。死ぬ気なんてありませんよ？　ちよつとふざけただけです……ん？

「『と、言いたいところだけど』つてことは……もしかして続きがあるの？」

「あるわよ！　聞くのー？　聞かないのー？」（イラッ）

「聞きたくに決まつてるー！」

「次ふざけたら一生童貞だから」（一ツ「コリツ」）

委員長は笑顔ながらも眉毛を引きつらせていた。笑顔が怖いとはこのことだ……。

そんなに怒らなくてもいいじゃない。ぐすん。でも怒った顔も可愛いなあフヒヒ。

「あなたはこれから脇役として生きていくのよ」

「……脇役、だつて……？」

「そう。物語には必ず必要となる脇役。それをこれから演じていくの」

「どういうこと？」

よく判らん……。

「あなたはすでに主人公時間を使い切った。つまりあなたには主人公になる力が残っていない。それでも主人公になりたい。そう思うなら方法は一つ。他者の物語に入つて脇役を演じること

「他者の物語？ 脇役を演じる？」

「主人公の人生に大きく影響を与えるような名脇役は、それなりの力を得ることが出来るわ」

「つ、つまり……どういうことだつてばよ……」

俺の頭上には“？”マークが大量に浮かんでいることだろう。

「簡単な話、他者の物語に入り込んで活躍し、人気者になればいいつてこと」

「人気者になると、どうなるんだ？」

「例えばドラマの脇役が人気になれば、その脇役を主人公にしたスピノオフ作品が作られることがあるでしょ？ それと同じことね」

「ふむ。なるほど、実に分かりやすい。」

「判つた。でも一体どうやって脇役になればいいんだ？」

「これから主人公時間を迎える人と仲良くなつて、恋愛の手伝いをすればいいの」

「そういうことね」

「よくあるパターンで安心した。……よくあるのか？」

「他者の物語にどんどん入って活躍すれば、いずれ спинオフが作られるかもしない。でも、それはとても大変なことよ？ 主人公の期待、信頼に全力で答えないといけないのだから。あなたはどうする？ やつてみる？」

「どうやら俺の主人公時間はもう無いらしい。このままだと一生独身だって！」

「そんな人生はまっぴらご免だ！」

「ならば答えはひとつしかないだろう！」

「やるに決まってるだろ！ 名脇役になつてやるぜ！」

「なんとしても主人公に戻つてやる！」

「それに脇役つていつても、ただ恋愛成就の手助けをするだけだ！」

「なんてことはない！」

「はず！」

「……ん？ 不意に疑問が俺の脳裏をよぎった。

「なあ、なんで俺に主人公時間がないこと、教えてくれたんだ？ お前にとつてはどうでもいいことだろ？」

「ええ、確かにどうでもいいわ」

「……なかなか辛口な巫女さんだな。そこがまた味がある！」

「でも、あなたには興味があるの」

「俺に興味！？」

「うはっ！ 久々に俺の青春が来たか！」

「あなた、色々と雑用してくれそうだからね」

「……そういうことね。まあ期待はしてなかつたよ。何せ主人公じゃないもんね……。」

「私は縁結びを司る神様の巫女なの。我が家は代々縁結びの神様を奉つていて、神様の手伝いをすることが仕事なの。でもね、最近仕事が滞っちゃつて。一人では限界を感じたから、あなたに手伝つてもらいたいの。それがさつき言つた『脇役を演じること』。それであなたは主人公に戻れる。私も楽できる。一石二鳥だとは思わない？」

「なるへそ。そういうことだつたわけね？」

ふーむ。要するにバイトみたいなものか。給料はお金の代わりに主人公時間。

「では来週から行動開始よ！ 手順や注意事項はその時に伝えるわ」

告白失敗、衝撃の事実から一転、この急展開。

いやあ、人生ってどうなるか分からないのですねえ……。

そんな俺の人生よりも、一つ気になっていたことがある。

「ところでさ、何で巫女服着てるんだ？ しかも何故黒？ 神様に仕えているからとか、なにか複雑な理由が？」

「 ただの趣味よ……」

「なんだって…………」（二回目）

一度あることは、やつぱり二度あつたね。二度目の正直なんてことわざは知らん。

第一話 巫女さんは委員長

「ふわあ～～～」

主宮高校に通う俺、里美公太は、人気の少ない朝の教室で、恥ずかしげもなく大きな欠伸をしていた。

ね、眠すぎる……。昨日、寝たの三時だもんな……。そりや眠いって。

なんだか考え事が多くてね。特にここ最近、色々とありますぎて……。告白失敗とかね。それと

委員長が巫女さんだつたりとか……。俺が一度と恋愛できないのだとか……。

なんだかんだでショックが大きかつたんだよね。だからこそ、今日は早めに登校してきたわけだし。

そうだ、先週の巫女さん。彼女の話をしよう。彼女は……って、ちょうどいいときに登校してきた。

「おはよう、公太」

田の前に立つ女子の名は縁朱夏。^{えにしづか} 我がクラスのクラス委員長を務めていて、顔良しスタイル良し、性格良しの黒髪短髪の似合つ、学校中の人気者だ。

「公太。 判つてるでしょう?」

自覚しているのかつていう田ですね……。もちろん判つてますよ!

！ 今日から脇役人生スタートなんでしょう？

「私が巫女コスプレをしてたこと、喋つたら殺すわよ？」

「そつちの話！？ あれ、すゞく良かったのに……。出来ればみんなに広め」

「判つてるわよね？」（ニシココ）

「……はい」

無意識に首が縦に振幅していた。怖ええ……。話を変えよ！……。

「委員長。先週言つていた手順や注意つて、一体何なんだ？」

「私のことは朱夏でいいわ。これからはパートナーだもの。私もあなたのこととは公太つて呼ぶから」

「いきなり名前で呼び合つだと！？ なんてハイレベルな！」

「それはさすがに恥ずかしいぞ！？ 委員長」

「……何照れてるの？ これからは当分仕事を手伝つてもらわなければならぬし、何より公太。あなたはもう主人公じゃないのよ？ 照れる要素ないでしょ」

「ふぐつ！」

「だから安心して名前で呼びなさい」

「……わかつたよ、朱夏……」

「理解できたならよろしい。詳しいことはまた後で話すわ。とりあえず主人公を見つけないとね。今はまだ見当たらぬけど近いうちに現れるはず。主人公が現れたら、私はすぐに分かるから、見つけ次第連絡するわ。……いい？ コスプレのことは内緒よ！」

やけに念を押して、自分の席に戻つていったな。そんなに隠すとか？

「……急に名前で呼べとか、コスプレしていること隠せとか、まったく女の子の気持ちはわからんなあ……つて！？」

突如視界を塞がれた。この硬くてこつこつした感触は……。

「おう、公太。金曜日はどうだった?」(だきつ)

「(だれ) じゃねーか! 朝(あさ)から髪(かみ)洗(あら)いしんだよ! ハー

六

黒光りする筋肉質な腕を振り払つ。えーい、離せ！ 男に抱かれ
る趣味はねえ！

「つれねえなあ、三田ぶりの再会だといふの」

一 やがましい！」

俺の視界を塞いだ張本人、馴れ馴れしくてムキムキなこいつの名前は浅間龍一という。

学校一例が良く、アホーツクでも常に上位成績。反面、学力は最下位。

趣味は筋トレとギャンブル全般。麻雀が好きで、名前にも龍があることから、俺たちはドラと呼んでいる。

いかつい外見や、過去にやんちゃしてたといふ噂のせいで、誰か
は敬遠されたり。限はーー双ふいざーー。

「どうだ、なんだよ？ 成功したんだろ？」 あの雰囲気で失敗なんかありえないからな！」

「うつ！」
(グサッ)

また壁には語りでなかつた……！

ま、まさかお前、成功を通り越してすでに性交までしたんじゃ……。週末を利用して彼女としつぽりな関係になつたとかねえ、だらう

な……！？ ま、まだ早いぞ！」

卷之三

「羨ましいねえ！」
「いっつう……！」（ぐりぐり）

「止む不得! 一いつてえ!」

痛い痛いほんへたに指を突き立てるな！
心の傷を広げるな！！

くそう！ こいつどれだけ力があるんだ！ じけようとしてもビ
クともしないとはっ！ 誰か助けて！！

「 ドラ、公太が痛がってるよ」

「 その声は 優！」

助けがきた！ 僕はその救世主へと視線を送る！

長髪をポニー テールのように後ろで纏め、長身でモデルのようなスタイルの眼鏡が似合つ、このイケメン。名前は和久井優わくいゆうという。優という名前の通り、成績優秀、運動神経抜群の超優等生なのだ！ ちなみに俺と優は幼稚園からの付き合いで一番の親友なのだ！ ほらほら、親友が困っていますよ！ さあ、助けておくれ！

「 公太、面白い顔だねえ。ドラ もつとやれ」

ちょっと性格が歪んでいるのも彼の魅力だ！！

「 あいよー」（ぐりぐり）
優の号令と共にさらに腕の力を強めるドラ。
「 うりきりものーーーーー 痛い痛い！」
「 なんて冗談だ。ドラ、もういいだらう？」「
「 そうだな。ほら、解放だ、公太」
助かった……。ドラめ、憶えてるよ……！

「 それよりも公太。どうだった？」
「 ギクッ」

「 どうだった？ つて。もちろん告白のことだよね……。

「 うう、どう言つたらいいんだろう……。

「」

「」

「……その様子だと”また”振られたのか」
「ばれた！？」

「はあ！？あの雰囲気の中、振られたのか！？」
「ドラの言つあの雰囲気とは金曜日の放課後のことである。
皆が祝福し、誰もが新カツプル誕生を祝う（一部妬みの視線はあ
つたが）ムードだったのだ。

「……ああ、振られちまつたよ

うなだれる俺。

「マジか……」

「そうか。それは残念だ」

一人は、それがまるで自分のことかの如く、俺と一緒に落ち込んでくれたんだ。

お前ら、そこまで俺のことを心配してくれて……（うるつ）
（うるつ）

「二人共、心配してくれてありがとな！でも、そんなに落ち込
まないでくれよ！もう過ぎたことなんだし」

「じゃあ優の負けだな。学食のBセシト、ようしく！」

……えつ？

「まさか麻雀と喧嘩以外でドラに負けるとはね」
「ハハハハ、俺はギャンブル全般に強いからな！」

あれれ？君ら、ひょっとしてボクで賭けをしていました！？

「まさかまた公太が振られるなんて計算外だ。今回は僕も手助けし

たし九割は決まると思つていたけど。確立はあくまでも確立つてことだね」

「ギャンブルは計算じやないからな。流れつてもんがあんだよ」

「ドラはいつも流れに恵まれすぎなんだよ」

「ぐすん……。びしきょう……涙が止まりませんことよ……。」

賭けに負けた優は、おもむろに財布から千円札を取り出して、ドラに手渡した。

「お釣りはいらないから」

「サンキュー、優」

無駄にイケメンだな！ おいー！

俺は今、友情とはどうあるべきかを考え直すべきなのかも知れません。

「ドラ、お釣りで公太にも何か買つてあげてよ」

「そうだな、どうせなら全額、公太のために使つかー！」

やつぱり大親友だよ！ 一人共ー！

「ふー、今日も終わつたか」

授業が終わつて帰りのHRが始まるまでの時間つて、一番リラックスできるよね。この解放感がたまらんね。

「そういえば今朝以降、朱夏から何も接触がなかつたな。……あ、

ウルモフ」

そう考えたとき、教室に担任が入つてきた。

「席につけー」

担任の蒙古先生。007のウルモフ将軍に似ていてことから、皆からはウルモフと呼ばれている。

日直の号令の後、ウルモフの楽しい楽しい説教半分のHRが始ま

つた。

必要事項とちょっとした小言の後、頭を搔きながら面倒くさがりに現在一番重要である案件を口にした。

「……あー、二週間後には学園祭があるだが、うちのクラスだけ出し物が決まってない。お前ら一体どうするつもりだ？」

三週間後、我が校の学園祭が一日にわたって開催される。でも我がクラスは、どうにも個々の自己主張が強すぎるといふ、纏まりが欠けているところか……。

「ZZZ……」

……優は寝てるし。

「腹減った……。もう我慢できん！！！」

……ドラはいつそりとパンをかじり。

「盗まれてる————！？」

……朱夏はケータイゲームに夢中。

我がクラスはこんな奴らばかりなわけでして。未だに出し物が決まってないのだ。

「このままでは何も出来なくなってしまうぞー。誰か良い案はないのかー？」

ウルモフが怒鳴り、静まり返る教室。無理も無い。

何故ならこの質問は、今まで幾度と無く繰り返されてきたものだからだ。

実はこれまでに幾つも案は出されてきた。しかし、その度に男女間で論争が繰り広げられ、対立。結局纏まらず廃案になってきたのだ。

次第に誰一人として案を出さなくなり、現状に至る。

「……はあ。お前ら、残りは二週間しかないんだぞ？ 本当にどう

するつもりだよ」

ウルモフもいい加減にしどといた表情で嘆息している。そりは言つてもなあ……。

そんな中、クラス委員長である朱夏が、唐突に立ち上がり提案した！

「占いをやりますーー！」

「……占い？」

女子（テニス部）「あ、それいいかも！」

女子（ラクロス部）「私、賛成！……和久井君との相性……占いつてもらおう……フフ」

女子（相撲部）「それちょべりぐー」（死語）

女子の間から賛成の声が上がる。なるほど、女の子は占いが好きだもんね。

しかし、男子の間からは反対が噴出。

男子（サッカー部）「占いなんてつまらないだろ！」

男子（野球部）「ソノヤーツス！」（やんなのやる氣でねーツス）

男子（オタク）「デュフフ、それ、リア充しか喜ばない内容ではないですか」

K.「ねえ、公太氏り」

「リア充ってなんだ……？」

優「Z Z Z……」

ドリ「はぐはぐはぐ いつーー 喉がーーー！」

と揃つて野次を飛ばした。この流れはいつも論争パターン

……！

「おいおい、大丈夫かよ……」

心配して朱夏を見ると

わ、笑つていいー？　この状況をー？　なんだあの冷徹かつ
余裕な笑みはー？

次第に大きくなる男子の声。そんな中、朱夏は凛として言い放つ
た！

「　巫女服」

「　　！？！？」

「の言葉に反応しない男子はいなかつた。騒々しかつた教室が、
一瞬にして張り詰めた空氣に変わる。

「みんな、よくお聞きなさいー！ー」

「ぐふつー。」

朱夏はウルモフを押し飛ばして壇上に上がり、力強く演説を始め
た！

……大丈夫か？　ウルモフ……。

「占いで最も大切なこと。それは雰囲氣よ。タロットにしろ、手相
にしろ、密に神秘的な雰囲氣を感じさせることが一番なの。そのた
め非常に重要なのが衣装。そして日本人がこよなく愛する神秘
的な衣装。それは一体何？」

「巫女服ですー。」

と誰かが元気よく答える。……ドラだった！

「その通り！　だからこや」

「クリという音が聞こえてくる。やはりドラだった。もはやドラの眼は龍のように猛々しい。……てか血走ってるだけか。

クラス全員の視線を一身に浴び、朱夏はどどめの一言を言い放つた！

「 女子は全員、巫女服を着ます！」

「 「 「 賛成だ——————！」」

男子たちは大いに叫んだ！ 魂の叫びって奴だね！
この叫びの中には、もちろん俺の声も含まれている！ 一番大声を上げていたのはドラだったが。

女子（相撲部）「ちょっと男子ガチうるさいんですけどーー、チヨベリバ～」（そろそろウゼエ……）

女子（ラクロス部）「ちょっと巫女服着てみたかったしいいかもね！ 男子にはドン引きだけど！ ……和久井君に見せつけよ……フ

フ」

女子（テニス部）「巫女服、楽しみだね！」

意外なことに女子たちから反対意見は出なかつた。みんな巫女服に興味があつたんだね。優以外。

……といふかこんな大歓声の中、寝続けられる優つてすげえ……。

我がクラス初、満場一致でクラスの出し物は占いに決まったのだつた。

第一話 主役はホッヂキス

「公太」

怒濤のHRが終わって間も無く、朱夏が声を掛けてきた。

「とうとう現れたわよ、主人公が。しかもこの教室に「なんだって！？ もう主人公が！？ しかもこのクラスだと！？ やばい……緊張してきたぞ……。」

朱夏には主人公時間を迎えた人間がわかるらしい。一体誰なんだ……！？

今は放課後。教室に残っているのはごく僅かだ。

「この中に主人公が……。だ、誰なんだ？」

緊張が走る。喉が渴く。何せ俺はこれから当分の間そいつのサポートに徹する脇役にならねばならないわけだ。見知った顔なら幾許かはやりやすい。

朱夏が人差し指を立て、ゆっくりと矛先をターゲットに向ける。

「主人公は……あいつよ……！」

朱夏が指を差した生徒。あの姿は……。

「……マジですか……！？」

俺の目に映った生徒。それは我がクラスで最も影の薄いと称された男。

「マジよ。今回の主人公。それは ホツチキスよーーー！」

「…………ホツチキスだと…………ーーー！」

ホツチキス。本名は確か倉敷啓くらしきけい……だったはず……。

クラスで最も目立たないのに、皆勤賞。

そして”何故か常にハサミやホツチキスを持ち歩いている”とい
う”目立たない奴あるある”を総取りしたかのような男なのだ。
それゆえに付いた仇名が”ホツチキス”。

「大丈夫なのかよー？ ホツチキスだぜー？ あいつが誰かと会話
しているところすら見たこと無いんだぞー？」

「でもやるしかないのよ？ でないと一生ー」

「やりますーー！」

……その先を言われるのがとにかく怖いぞ……。

「そしてヒロインは…………ああ。あの子ね。…………普普ッ！！！
「ヒロインだつて！？ ホツチキスの相手のことかー。朱夏さんや、
何で笑つているのですかな！？」

「ハハハハッ、ヒー、お腹痛いわ…………！ ごめんなさい、だつて今
回のヒロインつて、先週公太が振られた相手なのよ。これはまた災
難ねーー！ ハーツハハハ

「…………お前、同情する気すらないだろつ…………」

朱夏は顔を真っ赤にして笑つていたが、俺の顔面は蒼白になつて
いた。血の気が引いていくのがわかる。

「そんなのつて、ありか？ まだ心の傷、癒えてないんだぞーーー！」

「仕方ないでしょー？ もう決まつたんだから

先週、俺が振られた相手。それはクラスでも朱夏と人気を一分す
るほどのアイドル的存在。

「そんな……まさか　巡崎さんだなんて……！」

めぐりさきみと
巡崎美都。 それが彼女の名前だ。あだ名はみつちー。

美術部所属で、在学中に多くの賞を受賞している我が校きつての天才だ！

それでいて自分の才能を鼻にかけることもなく、おつとりとした性格で誰にでも優しく、男女問わず大人気のアイドルなのだ！

それに付け加え、あの高校生離れしたスタイル。胸もデカイ事も然ることながら、特筆すべきはあの尻！！ 素晴らしきかな安産体型で、モロ俺の好みだつたのだ！！

そう、俺は尻フェチなのだ！！

「信じられん！　だつてあの巡崎さんだぞ！？　ホツチキスとなんて考えられん！！」

「でもホツチキスなのよ。これはもう変えよつのない事実。……そうだわ、公太にもこれを見せてあげる」

そう言つて朱夏はバッグの中からヘンテコな形のメガネを取り出した。

「”見縁メガネ”～～！！」

「……なんだそれ？」

ドรามンガポケットからアイテムを出す時のSEが脳内に響き渡つた。

「このメガネはね……。なんと！　人の主人公時間を見ることが出

来るのです！！」

「見縁に見えるのか！？」

「ふふふ、洒落が聞いていて面白いでしょ？」

いや、そんなに面白くないけど……。

「そんな便利な道具があるのか！？」

「そうよ。公太、これでホツチキスを見てみなさい。面白いものが

見えるから」

俺はおずおずとメガネを取り、そつと掛けた。

「見えてきたでしょ？ ……”縁の糸”がね……」

ホツチキスを見る。特に何も変わった様子はない。……だが。

「…………おお！？」

見えた！ 微かにだけど間違いなく！ ホツチキスの左手薬指から、赤い糸が伸びていた！

「なんだあの糸！ あれが縁の糸つていうやつか！？」

「そ。主人公とヒロインを繋ぐ糸よ。運命の赤い糸つていうのは、これが由来なのよ？ 主人公の糸が、ヒロインの指に結ばれたら晴れてカップルになれる」

「ふむふむ。でも、その糸と主人公時間つてどう関係あるの？」
「糸の長さ＝主人公時間の長さなの。糸が長いと、それだけヒロインの指に近づきやすく、結ばれやすい。そういうイメージしてもらつて構わないわ」

「へえー、へえーっと、俺はエアへえーボタンをバンバン叩く。

「しっかりと見てみて。ホツチキスの糸がどこに繋がっているかを……予想は出来ているけどね。でもこの田で見ないと信じられない。

「……ああっ！」

予想通りの結果が突きつけられる。ホツチキスの糸は、巡崎に繋がっていた。

「分かつたでしょ？ ホツチキスの糸は、みつちーの指に結ばれている。だからホツチキスが主人公で、みつちーがヒロインってこと」

……分かつていたとはいえショックだ……。

だつてそうでしょ！？ ボク、コクつたの三日前なのよ！？

「そうだ公太。自分も指を見てみなさい。一目瞭然よ」

え……、ボクの指……？

恐る恐る自分の指を見ると……。

「ない！ 赤い糸どころか、その糸屑一つない……」

「そういうこと。それじゃヒロインと結ばれるどころか、結ぶのに必要な長さすらないでしょ」

「そういうことなのね……」

改めて自分の境遇を突きつけられた感じだったね。だつて、一ミリもないんだよ？ 縁の糸。

「ちなみに私はメガネなしで見ることが出来るわ。それが私の能力なの」

「能力！？ なんかかっけえ！？ 能力者バトルが出来るってか！？」

「……出来ないわよ。はい、メガネ返して。分かつたでしょ？」
確かに見えた。まだ細く、薄つすらとだが、でも間違いなく縁の糸は繋がっていた。だが！

「それでも納得できるか！ それに俺はまだ彼女のことを
「諦めてないの？ どんなことをしたって、絶対100%無理な
に？」

「し、しじー！ そこまで言わなくても…… 鬼！ 悪魔！ 」

「巫女です」

「そうでした」

……俺、案外余裕なのか？

「公太が諦めていようがいまいが関係ないの。もう縁の糸は繋がっ
たのだから」「分かっている……。分かってはいるよう……！ だけどよう……。

「やいなこと一生ビ」

「やいわせていただきます……！」

背に腹は変えられん！ 今しがたの辛抱であるぞ！ 頑張れ、俺！
「でも、俺はまだ手順なんて聞いてないぞ？ どうすんだ？」
「とにかく今は声を掛けるだけでいいわよ。少し会話したら戻つて
らっしゃい」

それが一番難しいんだよな……。ホツチキスと会話したことなん
て。

『ホツチキス貸してー』『はい』『ありがとづ』

……くらいしかないしな……。

とにかく俺の人生が掛かっているんだ。声を掛けるだけ掛けてみ
よづ。後は何とでもなれだ！

「あ、公太。一つだけ注意事項を言つておくわ」

勇む俺を朱夏が止める。俺が朱夏に視線を返すと、朱夏は真剣な眼差しを向けてきた。

「絶対にみつちーと付き合わないで」

！？

「それははどういう意味だ！？ そもそも脇役はヒロインと付き合えないのじゃ？」

「そう。付き合えない。でもね。付き合つて至るまでは常人と同じなのよ」

付き合つて至るまで……？

朱夏は話を続ける。

「主人公時間のない人間でも、付き合つて前までは普通に誰とでも接することができる。でも、いざ付き合つとなると話は変わつてくるの。告白やキス、それに準ずる行為は全てNG」

「つまりどういうことだ？」

「それは主人公のヒロインを奪つてしまつことになるから」

「……ヒロインを……奪つ……？」

「そう。今回の場合、公太がみつちーに告白したり、されたり、キスしたりすると全てが終わりつてことね」

「……ありえるのか？ そんなこと」

「ありえるわ。先に言つた通り、付き合つまでは普通に接することが出来るの。絶対に忘れないで。主人公のヒロインを奪つてはいけない。たまにあるのよ。我慢できなくなつて脇役がヒロインを

」

「絶対にしない！ するわけないだろ！－！」

俺は一度巡崎に振られているんだぞ？ ありえないって。

「そう。なら安心ね。でも公太、気をつけなさい」

朱夏はさりに険しい表情になり、言葉を続けた。

「主人公やヒロインは脇役次第で大きく心境や行動が変わる。公太のちょっととした間違った行動が、後で大きく響くこともある。公太が良かれと思って行動しても、それがマイナスに働くときもあるの。こればかりは予測できない。だからとにかく気をつけなさい」

「……判った……」

俺が良かれと思つてもマイナスに働くこともある、か。気をつけなきやな……。

「だからといって萎縮しちゃダメよ！ 最初はとにかく目立つこと！ それだけを頭に入れておきなさいー！」

氣をつけながらも、とにかく目立つ。ここつあ、ハードだぜ！

「では公太！ 早速行動開始よ！ 行つてきなさいーー！」

「ああーー！」

ついに始まる俺の脇役人生！ 一生童貞は嫌だ！ 絶対に主人公に帰り咲いてやるぜ！

名脇役への第一歩。それはすばり、主人公と仲良くなること！

今までまともに話したことはないけれど、なんとかなるだらつ。いや、なんとかしよう！

いくぜーー！ 俺ーー！

「なあ、ホツチキス！」

「…………な、何かな、里美君…………。何か用…………！？」

そりゃ驚きすぎだつて、ホツチキス。俺から声をかけられるのが
そんなに珍しいか？

珍しいよな。俺だつて久々に話しかけたんだから。

「いや、用があるつてわけじゃないんだ。ただ…………」

「ただ…………？」

「…………？」

「…………？」

「うつ。予想以上に会話が持たない…………。

そうだ！ こういうときは共通の話題を振れば無難だ！
まずは これで攻めてみるか！

「数学の授業、眠かつたよな！」

「…………僕はそうでもなかつたんだけどな」

何ですとー？ あの数学が眠くないとなー？

「で、でもさ。微分とか積分とか、聞いてるだけで眠くなるだろ？
「そんなことはないよ…………。僕、理数系の大学を目指してるから微積
分は勉強しているし…………得意なほうだよ？」

「マジか！ ジゃあ今日の宿題の答え、見せてくれよー！」

「あ、うん…………。別にいいけど…………」

よつしやー！ これで今回は優に借りを作らずに済むぜ！

…………つて目的が違うー………… そりじやないだろ、俺！ 何か話題を
そうだ！

「体育のサッカーはどうだった？ 楽しかったよな！ 何せ俺はハツトトリックを」

「僕、運動は得意じゃないから……あまり楽しくなかつたよ……。里美君は運動できるから羨ましいよ……」

「サッカーが楽しくなかつただつて！？ 俺なんて体育がなかつたら学校に来ないくらい楽しみなのに！」

「俺と好みが正反対だなんて……！ ダメだ、仲良くなれる気がしない……。」

「くそ……ひとまず話題を変えるぞ……！ 次は これだ！！」

「ウルモフ、どうなつたかな？」

朱夏がHRにて押し飛ばしたウルモフは、勢いのままに頭から転倒、保健室へ運ばれていた。

「そう言えば、どうなつたんだろう……心配だね……」

「ああ……心配だな」

「そうだね……」

「……は、話が続かねえ……。」

その時、唐突に教室の扉が開いた！

「痛たたた……、まつたく委員長の奴、無茶苦茶しやがる……！」

氣まずい空氣の中、頭に氷を当てたウルモフが教室に戻ってきた。

「ウルモフの兄貴！ 無事だつたのか！ てつきりフイリップンで戦死したのかと……」

「誰がウルモフだ！ 勝手に殺すな！ しかもそれ、”はだしの

ン”ネタだろ?』

「よく知ってるな……、ウルモフ……」

「お前もな……。そいやお前ら帰宅部だろ? サッサと帰つて勉強でもしひけ」

それだけ言ひとウルモフは顔をしかめて教室から出て行つた。

「ウルモフ、無事だつたな……」

「……そうだね……」

またもや氣まずい空氣。

こんな空氣、耐えられねーよー。ダメだ、さらに仲良くなれる気がしない……。

待て待て、ここで諦める訳にはいかん!! とつておきの話題を

……!!

「昨日のプロ野球の試合、見たか? 我らがジャイアーズの圧勝でさ!」

押売魔神ジャイアーズムズ! 他球団の良選手を惡魔の誘いで(金の力)で引き抜き、圧倒的財力でリーグを勝ちぬく俺の好みの球団だ!

「いやー、良かつたよなあ……。何せ打順1~8番までの全員が去年まで他球団で4番だった選手だもんな! まさにオールスター! 俺が嬉々として話し出すと、それに反比例するかのようにホッчикスの表情は沈んで行つた。

「……僕は相手のタイガルダズのファンなんだ……」
なんだと! ? タイガルダズファンだと! ? 天敵ではないですか!

关心タイガルダズ。ジャイアーズムズとは正反対で選手一人ひとりをじっくりと育てる地味な球団だ。俺の趣味に合わん!

「ジャイアーズムズは少し強引すぎるよ……。野球はタイガルダズみたいに選手を大切にしなきゃ……」

「そ、そうか？ 僕はあるの傲慢なプレイスタイルが大好きなんだけど……」

ジャイアーズムズとタイガルダズは因縁のライバル、犬猿の仲なのだ！

無論、そのファン同士の仲だつて悪い！ ダメだ……、もはや仲良くなれる気がしない……。

「……里美君……僕、帰るね……」

「お、おつ……。じゃあまた明日な……」

ホッキスは早々と教室から出て行った。

無茶言つなよ。俺だつてこれでも頑張つたんだぜ？

……などと言える空気ではないことは読めた。

不機嫌な朱夏だつたが、しばらくすると何かを閃いたような表情に変わる。……嫌な予感。

「公太。あなた今までずっと主人公をしていましたよ？ だから脇役に慣れてないのよ」

「う～む。 そうなのか？ 今まで主人公の自覚なんてなかつたけど」「自覚がないってほどに、主人公してたのよ。さすがは”元リア充”ね

「リア充つて、なんだ？」

「……」

「あ、おい？ 朱夏、どうしたんだ？」

「一体どうしたんだ！？ 朱夏がなにやらブツブツ言いながら震えている！？」

「……ん？ どうして拳を握り締めているんだ？ ……つて、グオエエエッ！！」

今度はみぞおちに入った……。い、息ができる……！

「……だ、だから……な、んで殴るんだ……？」

「ふん！」

倒れこむ俺を見下しながら、腕を組む朱夏が言い放つ。

「リア充という言葉を知らない時点で、リア充なのよ……な

んで私がこんな説明しないといけないの……」

「な、なんでそんなに怒っているんだよ……？」

「うるさい！ リア充つてのは昔の公太見たいな奴のこと言うの

よ!! モテモテでウハウハで毎日がリアルに充実して いたでしょ
う?」「

朱夏は俺にびしっと突きつけて、言い散らす。

「でも良かつたわね！ あんたはもう立派な”元”リア充よー！」

「元」書うな！ 今だてて十分そのリア充うせつだ！」

三公兩院が無いからその
もよ? とすると一生童貞

「止めてくれ———」

これからの方にはも勝手の何をするかをしてからだと教える必要があ
るわね……

聞きたくない！ 教えてほしくないぞ！ そんなこと！

「公太、これからね」

元は、ハーバードで教わった「アーバン・リサーチ」の河井聰一さん

! ?

—ケヨヨツ！—

「うむ。こ闇で女二
またもや腹パン。ちゅうと殴りすぎじゃないですか！？」

「はい」

暴力反対！
と言える空氣でないことも分かる。

うん。やっぱり俺、空氣読めるじゃないか！

「たゞ」

「うちに来なさいーーー！」

卷之三

と言つた上で、俺は半ば無理やり朱夏の家に行くことになつた

たのだ。

第二話 巫女さんは「スプレ好

「おーおー、どー行くんだよーー？」

「どーって、私の家に決まってるじゃない。もうボケた？」

朱夏の自己に誘われ、ついていくと小一時間。俺たちは何故か山道を歩いていた。

「ボケてませんよーー？ どうしてこんな獣道を歩いてるのかと聞いてるんだーー！」

「いいから黙つてついてきなさい」

生い茂る草木を搔き分けながら豪快に進む朱夏。とにかく見失わないようにしてないと……。

道無き道を進む」とおもそ30分。

「着いたわよ！」

「やつと着いたか……疲れた……」

必死に山道を抜け、辿り着いた場所。そこには

巨大な鳥居と千年杉に囲まれた神社があつた。

「神社なのかーー？」

「ええ。言つたでしょ？ 私の家は代々縁結びの神様を奉つていてるつて。ここの“縁神社”が私の家」

「ほえー」

大きな鳥居に厳かな社。辺りは静かで、聞こえてくるのは虫の声。こんなに落ち着く場所がこんな山の中に……あれ？ ここの景色……。

「俺、ここに来たことあるだーー？」

「さうなの？ 何しに？」

「何しに、って決まってるだろーー？ 縁結びの祈願をしにだよーー！ それよりも、一体どういうことだ？」

「どうこう」とって？」

「ここには階段があるじゃないか！ 何故階段側から上がらなかつ

たんだよーー？ そもそも何故山道を通つた！？」

俺は激しく追及したつもりだったのだが。

「山道の方が近道なの」

「……時間にしてどのくらいーー？」

「およそ5分」

しれっとほざく朱夏に怒るのも馬鹿らしくない。

「……それくらい我慢して階段から上がらせば……」

俺の咳きを無視して、朱夏はそそくさと社務所の中に入つていく。後を追つて恐る恐る玄関に入る俺。

「お、お邪魔しまーす……」

他人の家の匂い。それだけでも緊張するのに、女の子の家だもん
なあ……。心拍数上がるよ。

昔、彼女がいたときは、色々と事情があつて家へ遊びに行けなかつたからね。

『公太、こつちこつち』

「お、おづ」

先に家に上がつた朱夏が、玄関で佇む俺を呼ぶ。

「ビードー？」

『一番奥の部屋だから。』

廊下の奥から声が聞こえた。
なるほど、あの部屋ね……。

「…………緊張するぜ…………」

女子の部屋か……。雑誌や女子の会話とか聞く限り、さぞ可
愛らしい部屋なんだろ？！

あれだろ？ ぬいぐるみ！ でっかいクマとかあってやー。枕元
にたくさん置いてあつたり！

寝るときはお気に入りのぬいぐるみを抱いて寝るとか！ そんな
可愛らしい部屋なんだろ？！

そんな場所に踏み込む……。ワクワクが止まらねえ！！

「……フ、フオオオオオ……」（妄想中）

「あのー。人の部屋の前で変な声あげないでくれる？
あ。声に出ていたのか。

……よし。行くぞ！ ちやんとノックして

「朱夏、入るぞ？」

「…………」

先に言えー なら誘うなー…………とこつこびは心の中で抑えよう
！

今の世の中、女子の着替えより優先されることなど存在しないの
だ！

待つことおよそ3分。待ちわびた時間がやつってきた。

「入つていいわよー」

ようやく着替え終わつたか。さて、早速入れてもうひとつしましょ
う。

俺はドアノブに手を掛け、ゆっくりと回す。緊張の瞬間だね。

「この扉の向こう側には、きっとファンシー溢れる世界が広がり、心地よい香りと共に俺を歓迎してくれるに違いない！」（童貞の妄想）

さあー、この感動をこの田に焼き付けるぞーー！

「お邪魔しま すつ！？！？！」

俺は戦慄した。

扉を開けると共に鼻を突いた、なんとも籠った匂い。

部屋の光景を田の当たりにし、妄想のファンシー世界は、現実の前にあたかも崩れ去った。

「……マジかよ……」

「ん？ まあ、適当に座つてよ」

「適当に座れだとー？ ビーにそんなスペースがあるんだーー！」

床には食べ終わったお菓子の袋とか、ペットボトルとか、コンビニの弁当ももそこかしこに散らばっていて！

ティッシュペーパーを丸めた「」、DVDケースや服、拳句の果てには汚れた靴下まで散乱してるし！ 一人暮らしのおっさんか！？

んつ？ これはコスプレ用の衣装か……。巫女以外にもたくさんある…… つてありすぎだろ！？

壁には作りかけであろう衣装やウイッグが大量に掛けたり、しかも数が多くて窓が塞がっている…… 光が入らねえ！？

「…………」（放心中）

「公太、どしたの？」

「なんだこの部屋は…………つーつー？」

俺は無意識に叫んでいた！！

「レディに向かつて、何だとは失礼ね！」

「それはこいつちのセリフだ！！ 男の夢や妄想をぶち壊しやがつて

！！」

「知らないわよ、そんなこと。私の部屋なんだから、公太には関係ないでしょ？ そんなことより作戦会議よ！！ わざ、始めるわよ！」

「こんな周りが気になりすぎる部屋で作戦なんて立てられるか！！ あれはなんだ！？」

壁に掛けた大量の衣装を指差す。

「何なんだ！？ この大量の衣装は！？」

「言つたでしょ？ コスプレが趣味だつて！」

「巫女服は！？ 神社の家の娘だから、とかもつと深い理由はないのか！？」

「…………」

急に静かになつた朱夏。鋭い視線が俺を刺す。あれ？ もしかして地雷踏んだ？

「……確かに神社の家の娘として、巫女になることもあるわ。それに他の衣装だつて仕事で着ることもある」

「……仕事？」

「…………」

呆れ顔の朱夏。はて、仕事……？

「もう忘れたの？ 最初に言つたはず。私は縁結びの神様に仕える巫女として、仕事をしてゐて」

あー、そういうえばそんなこと言つてたね。あの時はショックな出来事が色々とありすぎて記憶が曖昧なんだよね。

「私の仕事。それは、誰かの脇役になつて、恋愛成就のサポートをすること。私は今までずっと誰かの脇役を演じてきたの。生まれてからずっと、ね」

「生まれてからずっと……？」

「そうよ」

……朱夏はしれつと言ひのけたけど、それってかなり辛いことなんじやないか？ 脇役がどんなものか、俺にはまだ分かんないけどや。

「主人公には様々な人がいるわ。学生だけじゃない。社会人やお年寄り、逆に幼稚園児だつている。その人達に合わせるために、様々な衣装が必要となつてくるの。あらゆる状況に適切な衣装が必要だつたのよ」

……なるほど、朱夏にはコスプレをする理由があつたのか……。感心してしまうな。

「そつか……。お前も苦労してんだな。この衣装も全部そういう理由だったのか……」

自分の使命を全うするために、これら全部用意したといつわけか

……。

なんて责任感のある奴なんだ！！

「でもね」

「でも？」

「元気にあるのは全部、ただの趣味よ……」

「…………」

「感心して撮しました!!」

「ちなみに」

「ちなみに……？」

「私、”性格コスプレ”もしているの」

「”性格コスプレ”……？」

さつきからオウム返しの連続だ。仕方ないよね。だつて驚きの連続なんだから。

「その名の通り、主人公の状況によって性格を変えるの。普段もしてるのよ？」

「……もしかして今は委員長な性格……？」

「よく分かったわね！ その通りよ……」

……これが本当に委員長の性格なのか？ 委員長って担任を突き飛ばしたりしないものだと思つけど……。

「主人公は千差万別。主人公にある程度好まれる性格を研究して、演じているのよ。もちろん、かなり細かく設定するのよ？」

「演じる、か……」

朱夏は笑いながら言つた。「それってかなりストレスが溜まることだよね。

学校でも性格を演じているんだろう? だとしたら、『につけば』で素の自分を出しているんだろう? ……?

そう考えると、朱夏って想像以上に大変な仕事をしているのか。……なら俺も主人公に戻る少しの間くらい、お手伝いしてみますか! 少しでも朱夏の負担が減ればいいんだけどね。

「では! 実際に演じて見せましょー!」

……あれ? 意外に楽しんでる?

「それでね、それでね わたちがいいんちょけんちかってね ふたりゅをくつつけりゅの」

「…………」

あの後すぐ、朱夏は着替えのために俺を部屋から追いで出し、しばらくするとまた部屋に招き入れた。

朱夏曰く『これから脇役を演じるのなら、私の演じる姿を参考にするといこ』とのこと。

その結果がこれだ。部屋に戻るとすでにこの状態だったのだ。

「ふたりよおんなじしゃせよつをしゃしえてね ふたりのじかんをふやちゅの」

「…………」

「ねー、ねー、じつたあ、きこてるの?」

我慢の限界だ！！ なんだ！？ ここの生物は！？

「どうして使うんだよ！ そんな脇役！？」

「ローリー」主人公用の脇役

四〇六

口リコンは犯罪だぞ！ そしてアーリを演じるのはもつと犯罪的だ！！

不覚にも少し口悪いと思つてしおつたのは秘密だ！

「朱夏、もう分かったから止めてくれ！ 脳が壊れる……」「こ」の程度でだらしないわね。だからホツチキスにも逃げられるのよー。」

「その恋人から逃げられたみたい言い回し止めでねえます！」

権限を使って二人を近づけて、学園祭の作業を同じにするから。公

太はそのサポートをしなさいよね」

……ああ、さへき語りていたのはそういうことだったのか。全く
聞き取れなかつたよ。

「それで公太。あなたにも宿題を出す」

「宿題？」

「そ、……えーと、この辺つにあつたはず……」

まるで映画の「ドライブ」がポケットから道具を探すときのようだ。元机から道具をポイポイ投げる朱夏。

「…………ないなあ。あ、これ！－ なんだ、ヤカンか」「整理しろよ…………。てか何でヤカンとか出てくるんだ！－？」原作再

現しそうでしょ！？」

「あつたあつたー！これこれー！」

朱夏が嬉々として取り出したもの。それは
「こ、これは……いわゆるギャルゲーというやつか……？」
「そ、ギャルゲー。ギャルゲーには色んな脇役が出てくるからね。
それを参考にしなさい。そこにある4本全部」

……同じような顔に、凄まじい髪の色だ……。てかこの髪形、一
体どうなってんだ！？

初めて見るギャルゲーのパッケージに思わず目を見張る。
というかこれって男用のゲームなんじやないの？

「女の子がギャルゲーなんてするなよ！」

俺は思わず叫んでしまった。この事がのちに後悔する」となる

「なんだつて?」(ブチンー) 朱夏が小さく呟いた声

何故なら
朱夏の核地雷を思いつきり踏んでしまったからだ！

朱夏はギャルゲーのパッケージを、まるで印籠のよつに掲げて、高らかと叫んだ！

「女の子がギヤルゲーやつて、何が悪い！？」

キッと睨まれる。……怖すぎるぞ！？ 身の危険さえ感じる！－
俺はその圧倒的な迫力に全身が震え、言葉を失い呆然とせざるを

得なかつた！

「……わ、悪かつたって！！ 朱夏、そんなに怒るなよ！ 本当に悪かった！！ 許してくれ！！」

「ふん！！ 分かればいいのよー。」

そこには怒り心頭でふんぞり返る朱夏と

とつさに土下座をしている俺がいた。

土下座は俺が身に着けた最強の護身術だ！

アライドはないのかさて?

「なあ、そろそろ許してくれよ……。女の子だつてギャルゲーくら
いしたいよな！ そうとも！ 僕が間違つていた！」
「うるさい、”元”リア充……」
「”元”を強調するな！」

こんなやり取りを続けるうち、朱夏の頭に上つた血もだいぶ引いてきたみたい。

「……そうね。もう許してあげる。だって公太はこれから一生、リ
ア充にはなれないんだもんね」

「一生童貞で死になら」
「やや――――――！」

「Jの女、絶対ドSだ！！

……いや、もしかして性格をコスプレしているのかも知れないから、実際はどうなのだろうか？

でも現実に目の前にいる朱夏はただのドSだ！！……鞭とか蠍燭とか出してこないよね……？

「でも大丈夫よ、公太！ 三次元がダメでも二次元があるわ！ ほら、彼女たちは裏切らないわよ！！」

「嫌ー！！ 聞きたくない――――！」

「ほり、Jの四本全部貸してあげるからー！」

「絶対に要らん！！」

「後悔するわよ？」

「うう……。確かに興味がないことはないんだけど。でもダメなんだ！」

俺は知っている！ そいつに手を出して廃人になってしまった隣の家のお兄さんを！！

「い、今はそんなことしている場合じゃないだろ！？」

「それがしている場合なの。さっき言つたでしょ？ 公太は脇役に慣れてないって。だからゲームから何かしら学ぶことが必要なの！」

「うう……、でも体から拒否反応が……」

嫌だ！ 俺は絶対に隣のお兄さんみたいにはなりたくない！！

「そんなに嫌ならもういいわ」

嫌がる俺の姿を見て、朱夏も興が削がれたみたいだ。薦めるのを諦めた。

助かつた……俺は廃人になるつもりなんてない……
俺はホツと胸を撫で下ろす。

「じゃあ一生”ぼっち”ね。まあせいぜい長生きしてね」

やつぱりこう言われるのね！ それは嫌だ！！ でも廃人になるのも絶対に嫌だ！！

「孤独死か……。最近は増えてるみたいだし、別にいいか」「ぎゃうっ……」

くそ、ちくちくと心を攻めてきやがる……
……だがギャルゲーだけは絶対に……！

「童貞のままお陀仏ね～」

「ぎゃああああああああっ……！」

「まあ私にはどうでもいいことなんだけどさ」

「うわーっ！ やります！ やらせてくれださい！ 貸してください！
いやむしろ売つてください……！ 童貞で死ぬのだけは嫌だ
！！！」

「風俗にでも行けばいいんじゃない？」

「それだけは絶対にしないと決めているんですけど……！ お願いで
すから、朱夏様～～～！」

俺が泣きながら懇願すると、朱夏は積まれたギャルゲーに向かつてびしつと指刺した。

「そ。そこまで言われたら仕方ないわね。貸してあげるわ？ じゃ

あそこにある四本を明後日までに全部クリアしてきなやこ

「明後日まで！？」無茶言いつなーーー！」

この四本を全部だと！？ 無理だろ！？ 俺、ギャルゲーなんてやつたことないのに！！

「学校にも来なくていいから。当然外出も禁止。学校には私から連絡しておくわ」

「セレナですかねのかよー?」

「当然でしょう？ それとも公太。あなた一生童貞でいいの？」

「やめてまいります!! 全ルートクリアしておまー!!」

۹۸۱

「鬼——！？」

「巫女です」

「そうでした」

ですけど。

「文句言わないの。時間も限られているのだし。明後日、ちゃんと協役になりきれて、一歩かぎりテストするからね。」

「テストだつて――――つ―！？」

もし不合格なら……まさか一生童貞なのか!?
合格せねば!!
ヤバイ、絶対に

……………それはそうと、明日、朱夏は一体何をするつもりなのだろう

か。

「俺が休んでいる間、朱夏は何するの？」

「ちょっと準備があるの。委員長権限を最大限行使してね……。」フ
フフフフフフ

フフフフフ

なんとこゝ黒い笑み！ やつぱり朱夏にええええええ！

「とにかく、公太はそのゲームをクリアする」と一 わかった！？」
「…………」「…………」

やつぱりやるしかなさうだな……。今日と明日でクリアできるのか？ これ。

「じゃあ携帯出して」

「え？」

予想外の朱夏のセリフ。

「アドレス交換。当たり前でしょ？」

「そ、そうだな……」

今後のことを考えると、朱夏と連絡しあつことは多いはずだ。アドレス交換するのは当たり前か……。
でもなあ……。

女の子とのアドレス交換って、本来なりもつとジキドキするイベントだと思つんだよね。

そりや人気者の朱夏のアドレスがゲット出来たのだから本来は喜ぶところなんだけどなあ。

なんだかなあ……。期待出来ないと知つていてるから嬉しくも何ともないんだよね……。

ドラに見せたら狂喜乱舞しそうなもんだけど。

「はい。登録終わり！ ょし、やつをと出でけ！！」

その後すぐ、俺はゲームを持たされて家から追い出されたのだが

た。

脇役サブストーリー1 一次元くよつJAPAN

妹キャラ『はやく、起きて。お兄ちゃん でないと キス、しちゃうよ……？』

「…………」

幼馴染キャラ『いい加減起きなさいー。せつかくあなたの為に朝ごはん作ったのに……。冷めちゃうわよー。』

「…………」

妹キャラ『お兄ちゃん、早く学校行こいつ？ そうだ、たまには手を繋いじうよー。』

妹キャラ『え？ 恥ずかしいって？ 何言つてんの？ 兄妹だよ？ これくらい普通だよー。』

幼馴染キャラ『ちょっと、私とも繋きなさいよー。……それとも何？ 妹とは良くて私とはダメ、なの…………？』

「…………」

「うわあああああ、鳥肌が止まらない……。何だこの恥ずかしきぞれのセリフはっ！？』

朱夏に渡された四本のギャルゲー。俺は最初の一本を起動し、プ

レイ時間およそ10分という序盤のうちに悶え苦しんでいた。

「はあ、はあ、あ、ありえんぞ、こんな設定……もしかして他の3本もこんなのはっかりなのか……？」

キラキラした目でこちらを見上げるパッケージの美少女たち。俺にはこのキラキラは眩しそぎる……！

「こんなのはけたら、俺は悶え死ぬ……確実に……！」

ゲームはさらに続く。場面はどの女の子に会いに行くかの選択肢

に。

「えーと、どうを選べばいいんだ？……ううだ、妹にしよう…

…

妹キャラ『お兄ちゃん！お弁当忘れてたよー。そうだ、お昼一緒に食べようよー!』

妹キャラ『お兄ちゃん！はい、あーん　どうへ。おこじい？』

妹キャラ『お兄ちゃん！今度は私にも、あーんして？』

「はい、あーん…………ううと待て！俺は今一体何を口走つていた！？」

やばいやー！洗脳が始まつたー！

妹キャラ『えへへ、おこじー　お兄ちゃん、もう一回ー。』

「もー、しょうがないなー、もう一回だけだぞー。」

…

「い、これは……ー　まさかー！」

すでに洗脳が完了している……！？

「おおおおおおおー！田を覚ませ、俺ー　現実に帰つてくるんだ！」

俺はとつたに思い出した！　そう、隣の家のお兄さんを…

そうだ！俺はいつか聞いたことがある！この叫びを！
あの時は何の叫びか分からなかつた！だが今なら分かる！この
れだ！

「……………つまつ……………」これがまあい……………」

そした、あの夜、あの夜以降、お尻さんの姿は見なくなつた！
噂によると、あれ以降、ずっと部屋に引きこもつてゲームに没頭
しているらしい！

「俺は絶対に負けない！ 俺は絶対に負けない！」
「俺も同じ状況になる可能性がある……！」
「俺は絶対に嫌だ！！ 俺は現実に生きるんだ！！」
「俺は絶対に負けない！ 心を強く持て、俺！」
「すると……！ 俺も同じ状況になる可能性がある……！」
「それだけは絶対に嫌だ！！ 俺は現実に生きるんだ！！」

妹キャラ『あ、お兄ちゃん。まつべたにじ飯粒ついてるよ。えいっ！ペル』

「ぬお！？！？」

妹キャラ『くくく、』ねえね、お兄ちゃん……。ここ、やつらやつた『』

「そうかそうか、なら仕方ないなあデヘヘ。」

ま……まか……俺は……すでに……洗脳されて……！？

「うわ、何が何だかわからんの？」

俺が悶絶している最中聞こえてきた、現実の声。

「ひ、聖！？」

俺にはひとり妹がいる。名前は聖^{ひじり}。年齢は俺より一ひとつの中二だ。

「入るよ？」

「ちょ、おまつ！」

待て！ 今部屋に入るな！！ 見られては非常にまずいものが…！ お願いだから少し待つて！ セめてテレビの電源くらいい…！

そんな願いも虚しく無慈悲に部屋の扉は開いた。

「何してんの？ こうに。そろそろご飯だよ？」

「い、いやあ……ちょっとゲームをね」「

間に合つた！ あきらめきりテレビを消すことが出来た！ だが。
「新しいゲーム？ 私もやりたい！ ちょっと見せて！」
「待て、これはお前に出来るような簡単なゲームじゃない！ ……あ！」

俺は言つてから後悔した。そつだ、こいつは…。

「へえ、それは面白そうだね……！ 私に出来ないようなゲームなんて興味あるよ！」

極度のゲーム好きだつたんだ…！ まるで獲物を見つけた肉食獣のように舌なめずりしながら迫つてきた…！

「とにかくゲーム画面見せてよ！ 私、アクションやRPG、シミューティングやパズル、格ゲーでさえ得意なんだよ？」

そういうえばこいつ、ゲーセンで廃人達をフルボッコにして泣かせた事もあつたな…。あの時は笑えたけど。いや、そうじゃなくて！

「とにかくダメだ！ さ、先に飯食つておるよ」

「えー、ゲームゲームう……」

近づく聖を必死に抑えるが、予想以上にその力は強かつた！
「二う二い！！ 少一で二一から見せては！！」

「ノルマ」

「少しこそいいから見せてよー！」

テレビの電源ボタンは俺の体でガード！　後はゲームの電源ボタン！　これを押せば……！

「ほつ、ポチつとな」

150

「わくわく。どんなゲームかなあ！？」

ゲームはオート再生で進めていた。頼む……！ セめて当たり障りのない共通ルートくらいでいてくれ……！

妹キャラ『お兄ちゃん、だいすき

という儘い願いすらも、
人々に打ち砕かれた。

.....

妹キャラ『お兄ちゃん、一緒にお風呂はいろ
背中流してあげる

ね
！
ル

しかもよりもよつて入浴シーンだつて——！？

111

妹キャラ『お、お兄ちゃん、そんなとこ、触りないでよお……。で、でもお兄ちゃんだからいいのかな……?』

「ちよ、おま! いくらゲームだからって 何やつてんだ!…? こんなもの聖に見せたら……。」

俺は恐る恐る聖へと視線を向けると。

「……………」「……………」

「……………なんでしょうか?」

聖はこちらへ至つて普通の笑顔を向けてきた。ただ眉毛がピクピクしているのを除けば。

「最低」

「……………はい」

笑顔は突如反転し、腐った魚を見るような視線を突きつけてきた!

ドスドスと部屋から出て行く聖。最後にこちらを一瞥して。

「当分、声掛けないでね」

そう言い残して出て行った。

後にはオートで進むゲーム画面と俺だけが残された。

妹キャラ『また一緒に入ろううねー お兄ちゃん』

「やがて二〇二〇年...」

第四話 朱夏の激励

「ね、眠い……」

水曜日の朝6時。

重いまぶたを擦りながら、誰も居ない教室で一人呟く俺。

「なんだってこんな朝早くから……」

実は昨日の夜、シユカからメールが来たのだ。
その内容とは

朱夏『明日、6時までは教室に来なさい』

『……』

「おはよう。ちゃんと来てるわね」

『……』

少し遅れて朱夏も登校してきた。なるほど。これが委員長モード
つてわけね。

『当たり前だろ？……』

朱夏から来たメール。実はあれには続きがある。

朱夏『……來なかつたら、一生童貞だから』

もはや脅迫メールじゃないか、これは……。

「それで、こんな朝っぱらから何をするつもつだ？」
「…………」

朱夏に問いかけるも、黙つたまま答えよつとはしない。それだけ
ろか呆れ顔でこちらを見ていふ。

「どうした？ 朱夏」

「…………」

一体何なんだ？ 朱夏の表情は依然として変わらない。

「おい、朱夏。いい加減に」

「せいや！－」

「グフツ！－」

朱夏は唐突に拳を振り上げたかと思つと、その拳を躊躇いなく俺
の腹にぶち込んでいた！

…………最近こいつには殴られてばかりな気が……

「な、何故殴つたし！－？」

「…………」

「…………へ？」

「へ？ つじやないでしょ？ 早くリアクションなさい！」

「そ！」は脇役らしくリアクションしなさいよー！」

なんとこゝ無茶振りなんですか！？俺は芸人じゃないぞ！？
……つて、俺はそんなつまらない理由で殴られたのか？

「めひやへひやへひつな！ 朝つぱらから変なこと言つてんじやねー
よー。」

「とにかく、貸したゲームの脇役つぽいことをしなさい！ 言つた
でしょ？ テストするつて！」

「ああ、なるほど……。これはすでにテストつてわけね。それを先
に言えよ。」

朱夏から借りたゲーム。その脇役つぽいとか……。

ああ、そういえば最初名前の読み方が分からぬキャラがいたよ
な。確かあいつは……。

はるせら、だつけ？

「おはよう、朱夏。これから一体何をするんだ？ それと便座
カバブフアアアアアアアツー！」

「、今度は正拳突きですか……！？」

ああ、もう慣れてきたよ……。この痛みが段々と快楽に変わつて
いくんだね……。

……つて、そうなつたら終わりだぞ、俺。

「うーん。まあ合格ね」

「じゃあ何故殴つたしー？」

「そういうキャラだつたでしょ？」

「……」

た、確かに……。再現しそうス、朱夏さん……。

「どう? 全部面白かったでしょ?」

「ま、まあな……」

代わりに大切なものを失つたけどな。未だに聖は口を利いてくれないし……。

「しつかりゲームをやり込んだみたいね。では早速作戦を開始しましょう!」

ついに俺が脇役として動くときが来たようです。出来れば殴られる役はもう嫌だなあ……。

「今回の作戦名。それは」

(「クツ……」)

「……”同じ作業で親密度アップ作戦! ” 略して” オナップ”! ！」

「……」

「どう! ? ” オナップ作戦”。いい名前でしょ! ！」

「ソ、ソウデスネ」(棒)

い、言えない……。ネーミングセンスが無さすぎるだなんて……。
……とか色々と不味いだろ、その名前! ! 一步間違えたらセクハラですよ! ?

「でしょでしょ! ? これ、昨日これ考えるのに5時間も掛かったんだから! 」

「ソレハタイヘンデシタネ」（棒）

う……？ そんなキラキラした目で見るなよ……。心が痛くなつてくるだろ

「そしてこれがオナツプ作戦の為に作つたアイテムよ！」

教室の後ろに置いてあつたダンボールを、高々と血邊げに掲げる
朱夏。

「なんだそれ？」
「これはなんと……。」
「くじか？」
「……………？ ビ、どうして分かったの！？」

いや、そんな驚く顔をされてもね。そりや分かるよ。箱の上に穴開いているし、何より

「思いつきり”くじ”って書いてあるぞ……？」

」

「そうー、これで学園祭の作業の班分けを行つのよー。」

……あー、はいはい。今回もこのやり取りを無かつたことにするわけね。だいぶお前の性格が分かつてきたよ。さすがに演技じゃないでしょ？

「今日のHRでみんなに引いてもらいたい。HRのページの中身は委員会
である私が作ることになつてね」

作ることに”なつて”、ではなく”した”のだろうな。

「なんと…」ぐじ箱に細工を施したの…」

朱夏が箱の中を指差す。中には無数の数字が書かれた紙がビニール袋に入っていた。

くじに書いてある数字は、おそらく班分けの数字。穴もひとつしかないし。

一見して、ビニもおかしなところはない。

「これが細工？ 普通に見えるが……」

「そう思わせなければ細工にならないでしょ」

「その通りですね」

「よく見て。このビニール袋。実は一枚重ねになつているよ

「ほほう。それでそれで？」

「ターゲット以外の人があくときには、そのまま上の袋のくじを引かせる」

「ターゲットには下の袋。下の袋には7の数字しか入つてないの。私達とホツチキス、みつちーの時だけ下の袋を開ける

「だから私達はどうやっても同じ班になれるってわけ」

「なるほどな。昨日の準備つてのはこれのことだったのか」

朱夏もやることがえげつねえぜ！ そういうの嫌いじゃないわ！

「これで確実に同じ班になれるな……」

「……しかしこれ、どこかで見たトリックだな……。確かテレビideon

「フマで。」

見ると、朱夏は何冊かの本を抱きしめていた。

「あ、あれは！ なぜ ス！？」

必死に隠しているが丸見えだ！ 僕もあの本を見たことがあるぞ！ ブック フで！

よく見れば朱夏の本、 ックオフの値段シールが付いてるじゃ ないか！ 好きなら新品で買えよ！

「次郎最高……！」

知らんわ！ つヒツツ コミを入れてやりたい。

……そんな」としたら確実に殴られるからしないけどね。

「とにかく、準備したのはこれだけなのか？」

妄想に浸りきっている朱夏をこちらに戻さないとね。

「そうね。後はターゲットの情報を集めたわ」

……思つただけどこいつ、一体どうやって情報を集めてるのだろうか……。

「今回の主人公、ホツチキスは、今までほとんど女の子と話したことがないくらい内気な性格。だから今回は非常に難しいミッションになるわ」

そうだろうね。俺だって一昨日の会話が歴代最長だよ。

「だけど、ホツチキスには一つ、趣味があるの。それは電子工作」

「電子工作？ なにそれ？」

「電子部品を使って工作をすることよ。発光ダイオードとかトランジスタとかを組み合わせてね」

「…………それっておもしろいのか？」

「ダイオード？ トランなんとか？ 英語はわからん。

「好きな人は好きなよ。でね、今回はそれを利用することにした

わ

「どうやって利用するんだよ？ まさか俺にも電子工作しきつてん
じゃないだろ？」

「まあそれもあるけどね。メインは電子工作を学園祭で使おうと思
つて」

「使えるのか？」

「電飾よ。占いの館の電飾。雰囲気を作り出すためには照明を工夫
しないといけないけど、それを電子制御してもらおうと思って」
「自動で出来るから当田の人員も節約できるし、悪くないでしょ？」

「へー、そんなことが出来るのか」

「それにそういう大道具係つて、当田あまり田立たないしホツチキ
スにはぴつたりだと思つ。私達の班は大道具に決定。だから、はい

」

「なんだ？ …… つて、おも！」

朱夏はどこからともなく数冊の分厚い本を取り出し、ドンと俺の
机の上に置いた。

「『サルにも出来る電子工作』…………？」

……これはあの有名な『サルでき』シリーズの本ではないか！
色々な作品に出てくる伝説のシリーズだ！！

「それで、やっぱり俺もやるわけね…………」

「大道具係になるんだから当たり前でしょ！ これで少しは勉強し
なさい！」

「それに電子工作という共通の話題が出来たら、あなただけって話し
やすいでしょ？」

大道具なんて地味な仕事、初めてだよ…………。でもまあ確かに、今
の俺にはホツチキスとの共通の話題がない。

ならこれで少しは話題が出来るかも。

「わかったよ。」これで少しは勉強しておく

「よろしく。そうそう、その本、図書室で借りたんだけど、返却期限は学園祭の次の日だから。公太から返しておいてね」

「…………」

ま、まあ朱夏がわざわざ借りててくれたんだ。そのくらいはね。それに俺は主人公に戻るために何だってすると決めたんだ。この本の内容を理解することくらい容易いことだ。

と、意気込んでページをめくつ

そして閉じた。

「…………無理だ…………わけわからん…………」

沈む俺を他所に、朱夏の情報公開は続く。そして一番気になる情報が来た。巡崎さんのことだ！

「次にみつちーのこと。あんたはよく知っているでしょ？ だから軽く説明するわ」

「ふぐー！」

俺の心が悲鳴を上げる！ 傷口をナイフで抉られるような、そんな痛みを感じる！ …… 実際にされたことはないけど。 「彼女はおつとつとしていて、優しく人当たりもいい。誰からも慕われ、先生方からの信頼も厚い」

「そつなんだよ。巡崎さん、誰にでも優しいし、おひとり見て見ていて和むんだよなあ……。

「部活は美術部で、昨年の清桜展で、銀賞を受賞。テレビでインタビューも受けてるわ。……チートレベルな子ね……」

清桜展と言つのは、俺たちが住んでるこの町を中心とする地域、清桜市が主催する絵画コンクールのことだ。

プロアマ問わず、毎年一千以上の作品が応募されてる、国内でも屈指の絵画コンクールなのだ。このコンクールを足がかりにプロに転向する画家だつて少なからずいるほどである。

「巡崎さんって、やっぱり天才なんだな……。

「ちなみにスリーサイズは上から 」

「 なぬ！？ そこまで調べてるのか！？ 恐るべし朱夏！
さあ、早く続きを！

「 なんてさすがに調べてはいけないけど」

「 ですよねーーー！」

「 彼女の好きなタイプは …… ププツーーー！」

「 そこ笑うところーーー？」

「 男として一番気になるところだぞーーー！」

「 だつてさ、好きなタイプつて。すばり公太みたいな人だつて」

俺の中で何かが崩れ落ちた。

「いやー、あなた達って本当にお似合いなカップルだったのよね～。
少しでも主人公時間があればね～」

「はうひつーーー！」

やつぱりそうだったのか！ どうしよう、涙が止まらない…………！
あの告白のときはまだ、彼女は俺のことが好きだったんだ……！
それなのに！ 僕に主人公時間が残つてなかつたばかりに！
なんたる不幸だ！

「ほらほら公太、よしよし、良い子だから泣き止みなさい」

朱夏はポケットティッシュを取り出し、俺の鼻にティッシュをあ
ててくれる。

「ほら、チーンなさい」

「チーン」

何故だろう、今はやけに朱夏が優しい……。

「…………”優しい姉の役”ってのも意外に悪くないわね…………！」

「…………って、おい！？」

ここで性格コスプレを試してたんですか！？ 性格”悪魔”の間
違いだろ！？

「でも公太。これだけは覚えておいて」

……朱夏つて唐突に真剣な顔になることがあるよなあ。そういう
ときは大抵大切なことを言うんだ。

「公太がこれから行う脇役は、」の程度で泣いていられるほど簡単なことじゃない」

「自分が本気で惚れた人を、他の誰かとくつつけるの。それは多分、想像を絶するほど心の痛みを伴う。

「あなた達が過去、互いにどう思つていようと一切関係ない。あなたはもう主人公じゃない。彼女とは一度と恋愛できない」

「理解しなさい。これは公太がもう一度主人公になるための代価。こんなに大きな代価を支払うんだもの。失敗は許されない。だから

「

「 本気でやりなさい。公太 ！」

朱夏の鋭い言葉。だがその言葉は、想像以上に優しいものだつた。俺を気遣う暖かさを、言葉の中に感じることが出来た。

それを聞いて尚、落ち込んでいるほど、俺は弱くない。……はず！

「朱夏の言うとおりだな……。俺はこれから一人の脇役にならないといけないんだよな。ならこの程度で泣いてなんかいられないな」

「そうよ。辛いでしょうけど、主人公に戻るために頑張りなさい」「そうだな。俺はまた主人公にならないといけないんだ！」

涙を拭つて決心する！

「ありがとうな、朱夏！ おかげで元気が出たぜ！ 今ならどんな役だらうと演じきれる自信があるぜ！」

「その意気よ！」

朱夏の激励は、俺の心を燃え上がらせた！！ やつてやるぜ！ 目指せ、助演男優賞！！ うおおおおおおつ！！ 燃えるぜ！！

「…………」後輩を励ます先輩の役” つてのも、結構ありね…… フフ……

俺の心は今、灰になつた。

第五話 脳役としての自覚

朝の8時。教室には次々と生徒が登校してきた。

その中にはホッチキスや巡崎さんの姿も。今日からあの一人をくつつける、か。

これから行う作戦のことを考えると、妙な高揚感が沸いてくる。

「おはよう、公太」

「あ、ああ。おはよう、優」

始業時間ぎりぎりに登校してきた優。

……そういえばドラの姿はないな……。

「ドーリー?」

「さあ。いつも通り遅刻だろ? それよりも公太」

ぐつと顔を近づけられる。息があたる程の距離。なんだ? 恥ずかしいじゃないか。

「ど、ど、ど、いたんだ? 優

「公太、今日はやけにそわそわしてないか?」

目線を合わせて僅か一秒。たつたこれだけで優は何かを感じ取つたみたい。なんて鋭い奴……。

「公太、何か企んでいるのか?」「ちょ、一体何の話ですか? ボクは普段どおりですとも! 何も企んではおりませんことよ?」

「とぼけたつて無駄だよ？ 公太つて焦つたり嘘つくときつて一人
称が”ボク”になるだろ？」

「それに昨日の欠席。僕の記憶違いじゃなければ公太は皆勤賞を目
指していただろう？ それなのに休むのは怪しい」

「鋭すぎるー！ …… というか俺にそんな癖があつたのか！ 知ら
なかつた……」

さすが幼稚園から一緒に過ごした仲だぜ！

だがここで優に悟られるわけにはいかないのだ！ 何せくじの細
工はみんなには内緒なんだからな！ とぼけるしかない！

「そんなことないって。考えすぎだろ？」

「……本当にそうかな？」

「うう、こいつ本当に恐ろしい！ 誰か助けて！」

「おはよう、お一人さん！ 公太、昨日は一体どうしちまつたんだ
よ？ 寂しかつたぞ！」

「この筋肉質の腕はドラか！」

「えーー、苦しい、放せ！ ドラーー！」

「などと言いつつ、心中では遅れて現れたメシアに感謝して
いた！」

「よくぞこのタイミングで来てくれた！ 助かつたぜ！」

「体は大丈夫なのか？ 委員長の話だとインンになつちまつたそ
うじやねーか！」

「……ンキン！？」

朱夏の奴、適當にも程があるぞ！？

「あれ、相当辛いらしけな……。みんなが噂してたぜ……。ついでインキ つてなんだ?」

皆が噂を！？ といふことは、すでに学校中に広まつてゐるつてことか！？

「……朱夏め……適当な「」とを……」

俺は朱夏を睨む。よくも適当なことを、と…

だが、何をどう間違えたのかは知らんが、朱夏には俺が感謝していると勘違いしてたらしい。まさかのサムズアップ。

る声が！！

女子（テニス部）「里美君って、あれなんだね」「

女子（ラクロス部）「ちょっとイメージダウンかな？」和久井君の
だったら私が舐めて治してあげたい……」

男子（サッカー部）「あ～、残念！-！」

男子「疑わしきは爆する！」
公太氏オワタ WWWWWWW

「……さすがにあれは嘘だと思ったけどね。噂が広まるのは早いね」

「みんな、違うんだ！ あれは嘘だ！ 信じじるな！ 昨日のはただの風邪だよ！ 全部委員長の嘘だ！」

男子（サッカー部）「なんだ、嘘なのか……つまんね……」

男子一
でも委員長の嘘なら許せる！
可愛いは正義！！」

女子（ラクロス部）「でも里美君が言つことが正しいってわけじゃ

ないし

女子（テニス部）「むしろ恥ずかしいって理由で嘘を言つてるだけなんじやない？」

井川

論一蓮いつらゐが、一體づらすれば。」

そのときだつた！

「みんな。聞いてくれ！」

「優！？」

急に立ち上がった優が皆に向けて演説を始めた！

「実は一昨日の放課後、僕の妹が足を滑らせて川に落ちたんだ！」
「え？ お前に妹なんていたか！？」

「…………少し黙つてろ…………」

ぐええ……。お前も俺の腹を殴るのかよ……。

「そのとき、妹を助けてくれたのは公太なんだ。川に飛び込んで命懸けで助けてくれた。それが原因で妹は風邪を引いたんだけど、公太はその看病までしてくれたんだ！」

ああ、全部嘘の話ね。俺はそのとき家でギャルゲーしてました。

……妹に嫌われていました。

「そのおかげで妹は元気になつたよ。でもその風邪が今度は公太に移つてしまつて……。昨日の休みはそれが理由なんだよ」

「よよよ、と涙を浮かべる優。なんてすげー演技。朱夏よりも巧いんじゃないか？」

「だから妹の恩人である公太の変な噂なんて流さないで欲しいんだ……」

優が語り終え、しばらくの沈黙。そして

男子（サッカー部）「里美、お前つてなんていい奴なんだーーー！」

男子（野球部）「カンドゥス！！」（感動です！）

男子「俺達に出来ないことを平然とやってのけるー。そこに痺れる憧れるうーーー！」

女子（テニス部）「里美君、見直しちゃつたー。本当にかつこいいよー！」

女子（ラクロス部）「みんなに訴える優君かつこよかつた……。まあ里美も和久井君の次くらいにはやるじゃん？」

女子（相撲部）「やべー、あちし感動涙で化粧ブレイクなんだけどーーー！」

噂は大歓声に変わつた！

男子一同「里美、お前は今、最高に輝いてるぜーーー！」

「…………優の力つてすげえ…………」

さっきまでの噂は吹っ飛び、俺は英雄扱いに！？ 恐るべし優の
人心掌握力！ 本日2人目の救世主だ！

「良かつたね、公太。噂は吹き飛んだよ？」

「さすが優！ ありがとう！ 持つべきはやはり親友だな」

「なあ、公太。インキンって何だ？」

「おい、ドラ！ どこかに をつけろ！」

「さて、公太。これで貸しを一つ作ったわけだ。何を隠しているか
教えてもらつか」

「なぬ！？ 今のは親友を思つて故の行動ではないのか！？」

「無論そうだけど。でも親友に隠し立てするのも良くないんじやない？」

「い？」

「ああ……、やっぱり優には勝てそうに無い……。誰か助けて……。

「お～い、席に着けよ～」

「ウルモフが教室に入ってきた！ 本日3人目の救世主！」

「さ、早く席に着けよ、優。ウルモフに怒られるぜ？」

「怪しいね……」

優は渋々と自分の席に戻つていった。そのときの視線は俺と、そして何故か朱夏に向けられていた。

朝のHR。ウルモフの適当な連絡事項が済み、いよいよ朱夏が例のぐじを持つて壇上へ上がった。

「今日から学園祭の準備のために班分けを行います！ 班分けは”公平”にくじで！」

「学園祭が終わるまで、このくじで決まった班で行動してもらいますので！ では出席番号順に引きに来いやーーー！」

ぞろぞろと番号の早い者から順にくじを引き始める。ちなみに出席番号はあいえお順だ。

俺達は細工によつてなるべきは7班。我がクラスは全員で34人であるため、各班を5人とする、丁度4人班がひとつ出来る。それが7班なのだ。

”え”の朱夏がくじを引き、無事に7班になり、次にホッキキスの引く番が来た。

「さあ、引いて」

朱夏はそう言いながら手元を僅かに動かして下の袋に通じる入り口を作つた。

そうとは知らずくじを引くホッキキス。結果はもちろん7班になつた！ よし、成功だ！ 次は俺の番！

「朱夏、俺にも引かせてくれ！」

「うるさいわね。さっさと引きなさい」と言いつつ目配せし、俺も無事7班に！

「うまくいっただな……！」

「ええ……！」

「後は巡崎さんだけだ。しぐじるなよ……？」

「当然……！」

フフフフフと互いに笑みを浮かべる俺達。

そんな俺達に背後から視線を送る男がいた。

席に戻ると優がやつてくる。

「公太、何班だつた？」

「俺か？これ。7班だよ！」

ピラピラと7と書かれた紙を見せ付ける。

残念だな。今回は優君と同じ班になることは絶対にないんだよ。少し寂しいですね！！

優を出し抜けた気がして笑いが止まらん！

「ふーん。7班ね」

優は素直に席に戻った。あいつは”わ”だから最後に引くんだよね。だから間違つても7を引く事故はない！

くじ引きへ視線を戻すと、朱夏が俺にアイコンタクト。どうやら巡崎さんにも7班のくじを引かせたらしい。

俺達はミッショングラントリートしたのだ！俺達はまたしても笑いを堪えたのだった！

だが俺は一つ、大きな勘違いをしていたのだ。

優が引き下がつたという、壮大な勘違いを！

くじ引きも終盤に差し掛かり、そして最後の優がくじを引く番になる。

……フフフ、すまんな、優よ。確かに前のお前の言つ通り隠し事はあつた！

だが、今回はお前に気づかれるわけにはいかんのだ！ 何せこのくじ引きには俺の人生が掛かっているのだからな！！ 優がくじを引いてこちらに戻つてくる。

「優、何班になつたんだ？ もしかして俺と同じ班か？」

もちろんそんなわけはない！ あるわけがない！ でもついつい尋ねたくなっちゃう！

別に勝負をしているわけじゃないのに、勝ち誇つた顔を浮かべる俺。

「 僕の班か？ 公太と同じ 7班だよ 」

「 そりかそりか。いやあ、実に残念だ。あつしは是非とも優君と同じ班になりたかった……って、ええ――――――！？！？」

そんな馬鹿な――――――！？

振り返ると、朱夏も俺と同じ反応をしていた。一体どうこういふだ！？

「え、えっと、優君？ 君のくじ、見せてもらえるかな？」
「くじ？ はい、これ」

優は余裕しゃくしゃくといった表情で、動搖する俺にくじを見せつけた。

「マジだ……。本当に”7”と書いてあるぞ……」

そのくじには間違いなく「記述されていた！！

俺と朱夏が唖然とする中、班が決まったといひ「」でHRは終了したのだった。

HR終了後、俺達は優に呼び出されていた。

「さて、説明してもらえるかな？」

「い、一体、な、なんのことかね！？」

落ち着け俺！ 動搖するな……、動搖するな……。 そうだ、人と
いう字を手に3回書いて飲み込めば！

「公太、それは緊張をほぐすやり方だよ」

思考がばれてる！？！？

「公太、委員長。みんなに公表してもいいんだよ？ あの箱の仕組
みと二人が意図的に班員を操作していったこと」

全部ばれてるー！？！？

「そしたら君達はクラスの皆から叩かれるだろうね？ 特に委員長。
「クラスの公平を保たねばならない立場の君が、そんなことをして
いたとしたら非難殺到だらう？ それはそれで面白そうだけど？」

やばい……。 優の顔、本気だ。 こいつ頭は良いし、表向きはすげ
ー良い人っぽいけど、実は相当な腹黒なんだ！

何事も自分さえ楽しければそれでいいといつ、典型的な狂人なんだ……！」

「だから？ 私は別にそなつてもいいけど？」

朱夏も負けずに反論！？

そういうえばこいつも狂人の一人だつた！ しかも痛さではこちらの方が上だ！！

「さすがは委員長。強いねえ。でも、公太はそははいかないだろ？」

ターゲットは俺！？ おいおい、無一の親友の俺を騒るつもりか！？ ……「いっならやりかねん……。

対象が俺になつたことで朱夏の表情が歪む。

「く、何が望み……？」

会話が犯罪者くさいぞ！？ この二人！？

「望みは特に無いんだけどね。僕はただ、何故こんなことをしたのか聞きたいだけだよ。二人が朝、こそそこやつてるのを見かけてね」

「何故いたんだよ！？ 朝6時だぞ！？」

「今日は学校に泊まつていたからさ。どうも家に帰る気がしなくてね」

実は優の家には複雑な事情があつたりする。

そのせいからまり家には帰らず、保健室に泊まつたり、うつむやでランチに泊まつたりすることが多い。

「それに朝の公太の様子が普通じゃなかつたからね。すぐに何があるつてわかつたし。それにホツチキスや巡崎も関係あるんだろう？」

「そこまで分かるのか！？」

「同じ7班になつたんだ。何があるのは確実だ。それに昨日委員長が聞き込みして回つてたのもこの一人のことだし」

それだけの情報でそこまで見抜いたのかよ……こいつマジで何者なんだ！？

「…………負けたわ。まさかそれまで見抜かれてたとは恐れ入つたわ。そりよ。あなたの言う通り7班は意図的に作った。理由は……今全て話せるほど時間がないわね。昼休みにしましょう」

「じゃあ昼休みにじつくりと聞くよ」

二人の会話が終わり、席へ戻ろうとする。……あれ？
俺、ほとんど会話に参加してねーぞ！？

「待て待て優、お前に聞きたいことがあるんだって！？」

「なに？」

「くじだよ、くじ！ どうしてお前も7班なつているんだ！？」

「7

班のくじは4枚しかなかつたはずだぞ！？」

事前に朱夏と確認したんだ。間違いない。

だが優と朱夏は「今更何聞いてんだ？」といつみみたいな目で俺を見た。なんで！？

「そつか。公太には分からなかつたのか
「まあ公太だしねえ……」

「ボク、すげーバカにされます！？」

「公太はバカだからね。無理もないわよ。何せ公太はバカだからね」

「バカだからねえ……」

「バカバ力言いすぎでしょー！？」

「……ぬぬ？ この一人、早速意氣投合してらっしゃいます？ さ

つきと立場が全然違うぞ！？」

「どうか朱夏さんはボクの味方じゃないの！？」

「公太、あれはね。僕が7班のくじを一枚偽造したんだよ」

「……偽造？」

「そう。公太が何班になつたかを訊いてからね。僕はくじを引くとき、偽造したくじを握つて箱に手を入れ、そのまま出した」

「他の人から見たら普通にくじを引いているよつて見えるだろ？」

「おお！ なるへそ！」

さすがは優。まさかこちらのトリックを見破つた上で、自らモードを仕掛けてくるとは……。

「私も最初は驚いたけどね。箱の中を見たらすぐに分かつたわ。くじが一枚余つていたんだもの！」

「まともに調べられたらすぐにばれるけどね。でもそれをしたら困るのは君らだろ？ だから成功したのや」

「ヤリと唇を吊り上げる優。こええええええええ！」

俺は心底、優を敵に回さないよつとしようとした誓つたのだった。

昼休み。

毎食を早々に済ませた俺達は、屋上にて優に事情を説明していた。

「……とことなんだ。信じられるか?」

普通ならこんなこと信じられないだろう?

俺だつて当事者でなければ信じられなかつただろうし。

「なるほどね。道理で僕が協力したのにも関わらず振られたわけか。うん。納得」

「信じるの早すぎない!?」

「……」

ボク、この先優君が詐欺の被害者にならないか心配になつてきましたよー??

「正直ざつぱだつていいんだ。面白ければね」

……この先詐欺の加害者にならないか心配になつてきましたです……。

「それで、これから僕はどうすればいいんだ?」

「そうね。ひとまず周りには黙つておいて。それと、もしあければ手伝ってくれないかしら?」

「いいよ。暇だし。具体的には?」

「一手に分かれて行動しましょう。私と公太はホツチキスへの接触、優にはみつちーへの接触をお願いするわ」

「さらに具体的な内容は放課後集まつてから伝えるから

「了解。じゃあ僕はこの辺で。また後でね、公太」

そう言つと優は手を振り、颯爽と屋上から降りていった。

「全部ばれちゃつたな……」

「いや、これはある意味ラッキーよ。優は色々と頭が回るし、何より公太のことを気遣つていて。公太が不利益を被るようなことは絶対にしないわ」

「あのエリートが？ 僕を気遣つていてる？ はははは、それはないつて！」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………さすがずっと主人公だつただけあるわね。親友の厚意にすら鈍くなつてる」

「鈍い、だつて…………？」

「鈍い。ギヤルゲーの主人公以上に鈍い！！」

「そ、そんな…………。そんなに鈍いのか…………？」

自分では良く分からぬ。でもそのことで朱夏が憤つっていたのは分かつた。

「やつぱり、俺鈍いのか？」

「当たり前でしょ！？ 鈍すぎるわ！！」

「あの優が他人の為に働く、それも無償で、なんてあり得ない事な

のよー?」

「クラスの子が体育で怪我をしたとき、それを気遣つぶりか平然と踏みつけてくるような奴なのよー?」

「誰かの為に働くなんて、それこそ公太やドラくらーなものよー!」

確かに優は自分以外には無関心だし、クラスでも浮くこともある。だがそれは優自信が望んでいることだと思っていた。

「公太は他人からの厚意に鈍感すぎる! もし主人公の厚意に気づけなかつたら、それこそ全て終わりなのよ! そんなんじゃこれら先やつていけないわよ!」

鈍感。確かにそうなのかも知れない。

考えてみれば俺と優は何かことが起きる度に一緒にいた気がする。俺の手に負えないことがあれば、真っ先に優に相談した。優はどんなことも嫌な顔一つせず解決してくれた。

そのおかげか、俺は一度たりとも嫌な思いをした記憶は無い。

これつてつまり……優からの厚意を、俺は無視していたってことなのが。

「そうか……。俺、主人公に慣れ過ぎていたんだな……」

朱夏に言われた初めて気づいた。そして親友からの厚意を感じ取れなかつた自分が酷く情けなかつた。

「これから慣れていけばいいのよ、公太」

「ういうとき、朱夏は必ず優しい言葉を掛けてくれる。それが性格コスプレであつても、嬉しかつた。

「そうだな。これから頑張つて慣れていくさー。」

脇役になると「う」とは、様々な人の厚意に気づき、繋がりを作つていくこと。

そして主人公を全力でサポートすることだ。

クヨクヨしている暇は無い！

「そうよ、その意氣よー。これからは一生脇役かも知れないのだしー。」

「それを言つなー！」

いつものやり取りだったが、今回に限つては、落ち込む俺を励まそうしてくれた朱夏の厚意を感じられた気がした。

脇役としての直覚を、少しでも得たのかも知れない。

第六話 作戦開始！！

「これから大道具担当となつた7班の会議を行つわーー！」

放課後、我らが7班メンバーは朱夏の号令で技術室へ召集されたいた。

技術室には様々な工具が常備されていて、学園祭準備期間中は誰もが使用できるようになつていて。

早速会議を始めて 始めていたのだが。

「いい！？ うちは大道具なのよ！？ 出し物の中で一番大切な仕事なのよーー 分かつてゐるのーー？」

と、やけにテンションの高い朱夏が一人で騒ぎ。

「…………」（チラッ）
「…………」（汗）

俺と巡崎さんは互いに意識しそぎていた。

巡崎さんは目線が合う度に顔を赤く染めて俯き。

俺はその度に自分の境遇を恨んだ。なんとも気まずい雰囲気。

……振られた今見ても、本当に可愛い……。ちくしょーーー！

「公太、泣くなら僕の胸で泣きなよ。少しあは氣分が晴れるかもしけないよ？」

優が両手を広げる。俺はもぢりとお言葉に甘えた！

「うわ――ん―― やっぱり諦められないよ――――――
「よしよし。元気出して！ 大丈夫、お兄さんの言ひことを素直に
聞けば、すぐに元気になれるよ――」

「うん！ ボク、何でもいうこと聞こちやうよ――」

「ならこの開運の壺をお買いなさい。これさえあればいつでもハ
ッピーになれるよ。今なら特別に5万円にしておくから――」
「えぐつ、えぐつ、うん！ ボク買っちゃうよ―― つて、どう
して親友にえげつない商売してるんだよ――？」

と、こんなやり取りが横で行われているのにも関わらず、視
線は本から動かないホツチキス。

なんてカオスな会議なんだ――。

「あの……、そろそろ真面目にやりませ――――？」

しびれを切らした巡崎さんが、天使のような一聲で提案。

「もちろん！ さあ朱夏！ われと会議を始め――――
「みつちーの前だけは強気なのね――」

当たり前だ！ 好きな子の前ぐらで見栄を張らせる――

「……もう無理なのにねえ――――――」

と優が呟く。

「おふう――」

ちくしょ―――― わかつてゐわい――――

「公太なんて放つておいて、さつわと会議を始めるわよ………
ほつとかれた！？ てか朱夏テンション上げすぎー…？」

「「つかの班は占いの館の電飾を行います！！ そこでホツチキス！」

「……な、なに……？」

突如指名されたホツチキスの顔には動搖の色が。朱夏の勢いについてける奴なんて、そういうからなあ。

「あなた、電子工作が得意って聞いたわ！ そこで！ 電子工作で自動制御できる照明器具を作りなさい！ 返事は！？」

「は、はい！」

某元プロテニスプレイヤーより暑苦しいな……。ホツチキス、軽く怯えてるぞ？

「朱夏、そろそろ少し落ち着け」

「ハア、ハア……。そうね。少し落ち着こうかしら……」

息を切らす朱夏の背中をさする俺。なんだこんなにテンションが高いんだよ……。

「ああ、また性格を変えているのか……。

「あの……朱夏さん、私は何をすればいいのでしょうか？」

おずおずと手を上げる巡崎さん。このメンバーの中で唯一大道具に向いていない彼女。

「無論、みつちーにも電飾をしてもらつわ！」

「……でも私やつたことないですよ。何をしたらいいか検討もつかないし……」

「そこは安心して。工作は全て男子、主にホツチキスがやつてくれるから」

「みつちーには電飾のデザインを任せると。占いの館のコーディネートをしてくれるかしら？」

それはいいアイディアだ。巡崎さんは美術部のエースだけあってセンスは抜群だしね！

「それなら大丈夫です！ 私、頑張りますね！」

「ううつ、可愛い……！」

素直に返事をする巡崎さんを見て、またもや俺の瞳には涙が浮かび、心は沈んでいったのだった。

「公太、あなたはホツチキスの手伝い。優はみつちーのサポートをお願いね」

「了解。今公太は沈んでいるから、後で僕から話しておくれよ」

「うう……ひぐ……ひぐ……」

「情けない男ね。みつちー、こんな奴、彼氏にしなくて正解よ？」

「は、はは……」

「おい！……なんてこと言いやがる……屋上行こうぜ……久しぶりに荒ぶつてきたぜ……」

「さあ、あまり時間はないのよ？ 早速行動を開始しましょ。ホツチキス、工作お願いね。みつちー、優、ついてきて」「荒ぶる俺を無視ですよー？」

というセリフさえ無視して、一人は部屋から出て行つた。

いいさ、俺なんて。ただの脇役だし……うう。

「公太、こつまでほやしてんんだ？」
「作戦開始だつて。リア充にな
りにいくぞ」

「……そうだ！ リア充になるためだ！」

その時、公太に電流走る

優は俺の心に火を着けるのが実に上手い！

リア充！ つい最近知った言葉だけど、とても甘美ですばらしこんな響きだ！

「俺はなんとしてもリア充になるぜーー！ やる気が出た俺は、もう止まらないーー！」

「はあ……まったく世話が焼けるよ。公太は……じゃあ僕は委員長らのところへ行ってくるからね、 つて、聞こえてないか」

優の嘆息が聞こえない俺は早速ホツチキスに話しかけた。

「ホッキス！」の中でも電子工作が出来るのはお前だけだ！俺に電子工作を伝授できるにはお前しかいない！早速教えてくれ！」
「う、うん。じゃあまずパートの説明からするね……」

ホツチキスは部屋の棚にあつた半田じてや電子部品を取り出して机の上に広げた

「これを組み合わせて作るんだよ。まずは回路図を描いて、その回路通りに部品を接続するんだ」

「つまく接続出来ていたら、電気を流したとき、ちゃんと動いてくれるんだよ」

「ふむふむ。で、どうやって接続するんだ?」

「ああ、それはね」

普段はほとんど喋らないホツチキスが、水を得た魚のように俺との会話を弾ませていた。

趣味のことを誰かと話すことがよほど楽しかったのだろう。

「 そりなんだ。で、これは?」

「これは発光ダイオード。今回は電飾だからこれを一番使つことになるね。様々な色を使って雰囲気を出さなきや」

「さすがホツチキス!! 詳しいな!」

「そ、そんなことはないよ……。基礎中の基礎だし……」

俺は二つの間にかホツチキスとの会話に夢中になっていた。

次の日の朝6時。

またもや『6時に来ないと一生童貞』などという脅迫メールが送

りつけられた為、こんな時間にも関わらず俺は学校にいた。

「相変わらず刺さるぜ……。このメールはよお……。ふわああああ
あ

さつきから欠伸が止まらん。しかし連日6時登校は辛いものがあるぜよ……。

「公太、おはよう

優が登校。……つてことは。

「昨日も学校に泊まつたのか？」

「いや、昨日は帰つたよ。ただ委員長に呼ばれてね

「お前もか

「まあね。これから毎日6時登校つて言つてたよ

マジですか！？ それは無理つてもんだ！！

……と朱夏に抗議しても無駄なんだろうなー。

「……一人とも、おはよう

朝に集まるように指示した朱夏が、元気よく教室に つて。

「……朱夏、 一体どうしたんだ？ その顔……化粧が崩れているぞ……？」

「……化粧なんてしないわよ……。ただどうじょつもなく眠いだけ…… あそこであの展開は卑怯だわ……」

ぶつぶつ言つてる朱夏は今にも倒れそうな顔をしていた。田の下
のでかいクマが、夜更かししていたことを証明していた！
どうせギャルゲーでもやつていたんでしうね……

「……ぶつぶつ……」

「本当に『ぶつぶつ』言つてるだとー?」

「……いいシジ『ミ』ね……。脇役にはだいぶ慣れてきたよ!」
さあ、会議するわよ……」

いや、そんな死にそうな顔で言われても……。

「委員長。あれの準備は出来たからね」

「本当!? さすが優ね! 今日、早速実行するわよ!」
「これでみつちーのホツチキスへの高感度アップ間違いなし!」
「テンション上上がるわ!」

「おお、復活。あれ? 僕、その話聞いてないんだけど……?
……と思つて『』いるのが顔に出たらしい。優が僕の耳元で囁いた。

「…………愛してるよ」

「!?」

「冗談だ」

「…………良かつた、俺にそつちの氣はない。」

「本当は死ぬほど恨んでいた。毎日呪いを掛けているくらいだ」

「!?」

「冗談だ」

「……いい加減、早く話せよ」

温厚なボクちゃんでもそろそろ怒りますよー?」

「そう怒るな、公太。愛してるのは本当だ」

「さも本当みたいに言つな！」
「で、作戦何だけど、これから
スルー！？」

と突っ込もうとした俺だが、耳から入ってきた作戦の内容に、思わず我が耳を疑つてしまつた。

そこまでやるのか！？ これ、素直な感想ね。

「 つてことで。何、最終的には上手くいくよ
「実はまだ考えがあるんだけどね……。これはまだ内緒にしておく
よ。学園祭当日が楽しみだね……」

優の黒い笑み。

こいつが何か企むとき、必ずこの笑みを浮かべるんだ！
そして決まってその企みは成功する！

「さあ、まずは最初のステップだよ。公太、技術室に行こつか
「…………マジでやるのか…………？」
「当然」
「さつさと行きなさい！――私はもう一つの方を仕掛けてみるわね
…………フフフ…………」
「まだあるのかよ！？」

学校最強（…………といふよりは最凶か……）の頭脳を持つ二人が揃
つているんだ。穩便には済まないだろうなあ……。

俺は諦めを込めた嘆息をした後、優に誘われるままホイホイと
ついていったのだった！

(……おかしい……)

帰りのH.R.中に気がついた。

前に座るホッチキスの様子がおかしい。妙にそわそわしている。
何かあったのか……？

俺は「」そっと声を掛けてみた。

(どうしたんだ？ ホッチキス)

「……」

反応がない。なら少しついてみるか。

(シンシン)

「……」

これでもダメか……。ならば、耳に息を吹きかけるか。

(フカー)

「ひえあああっ！－ も、里美君！－？ な、何か用！－？

お、気が付いた。

「ん？ どうした？ 倉敷」

ウルモフがホツチキスを睨む。

「ええ！？ あ、いや……すみません……」

今はH.R中。クラス中の視線を一身に浴びるホツチキス。おずおずと着席した後、俺に抗議してきた。顔真っ赤だ。

(今の公太君でしょ！？ 止めてよ、心臓に悪いから…)
(悪い悪い。声掛けても反応がなかつたもん。一体どうしたんだ
？)

(な、なんでもないよ……、もつ変なことしないでよね……)

ふいっとそっぽを向かれた。

……。

……これ女の子なら可愛かつたんだろうな……。

……。

……いや、そりじゃなくて。

(……おかしい。何ががおかしい……)

「ひえあああっ！… しゃ、朱夏さん…？ な、何か用…？」

なっ！？ 今度は巡崎さんだと…？

「ええ！？ あ、あの…すみません…」

顔を真っ赤に染めた巡崎さんが恥ずかしそうに着席。その隣で朱夏がニヤついている…。お前が犯人か。

そのHRが終わつて、すぐのこと。

「さ、里美君！ ちょっと相談があるんだけど！」「

「え……、ええ!? ほ、ホツチキスが、しゃべつたああああああ

まさかと言つべきか。ホツチキスの方から声を掛けてくるとは！

「…………そ、そりや僕だつて話へりこするナビ…………、えつと、そうじ

「おこおこ、少し落ち着け！」ちゃんと話聞くからー！」

焦りすぎて言葉になつてないぞ……。

「……落ち着いたか？」
「それば
で、何があつた？」

焦っていたと思つたら今度は沈んだぞ……。」つやただ「じゅせ
ないぞ!?

みるか。

『朱夏：ホツチキスを技術室に連れてきなさい』

やる気なのか、あれを……。」
わざと優の顔を伺うと、

〔 〕

と、いつもの笑みを俺に向ける。やつぱりやるのか……。

「なあ、ホツチキス。ひとまず技術室へ行かないか？」

「う、うん。そうだね」

俺は優の方を一瞥した後、ホツチキスと共に教室を出た。

「それで、一体何があつたんだ？」

「それは……それは……」

「このテンパリ方は普通じゃないな。明らかに何か大きい悩みを抱えていそうだ。」

つまり、だ。ここで悩みを聴いて解決してあげれば！

素晴らしい脇役としてホツチキスに印象付け出来るではないか！――

「ホツチキス。何か悩みがあるんだろ？ 話してくれよ。同じ7班の仲間じゃないか！」

肩を叩き、親近感を醸し出す！

「俺ら仲間だろ！？ 俺は仲間であるホツチキスの力になりたいんだよ！――」

さらに友情アピール！ 日頃からワンピースを愛読してゐるからね

！ こうのは得意さ！

「仲間……。うん。公太君、聴いて欲しいんだけど……」

「任せとけ！ 仲間のためなら何だってするぜ！」

ホツチキスはたつぱりと間をおいて、そして呟いた。

「……実は僕、ラブレターを貰っちゃったんだ……」

「フハハハハハ！ なんだ、ラブレターか！ ！ そうかそうか！」

ハツハツハ！ 何の悩みかと思つたら大したことじや

「 ラブレターだとうー？ー？ー？」

ホツチキスにラブレターだつて！？ そんなマニアックな奴がいるのか！？ ……ホツチキスに失礼でした。

「これなんだけど……」

ホツチキスはラブレターらしき手紙を取り出し、俺に渡してくれた。

一見するとただの手紙なんだけど…………！？

……ちょっと待て！ 普通ラブレターって封止めに可憐なシールとか貼つてあるもんだろ！？

なのにこれは…………！ シールの変わりに針で封止めしてある！？ 怪我すんだろ………… 不幸の手紙と勘違いしちゃうだ！

「…………中身も見てよ…………」

「お、おひ…………」

慎重に針を取り、中身を確認。

「これは…………？」

中身を見て愕然とした。なんじゃこれは！？

『皆君の暗くて目立たなくて、でもホッキキスとかハサミとか持つているところに惹かれました！ 私のこともホッキキスのようにガツチリと挟み込んでください！ もう串刺しにしちゃってください』

今田の午後7時、技術室でお待ちします！』

「…………」

「ど、どつなのかな、これ…………」

…………。

唐突に脳裏に浮かぶ、あいつの顔…………。

「もう一通来てるんだけど…………」

「まだあるのー!?」

なんとなく読むのが怖いぞ。

そして二通目。

『啓君のことが好きで夜も眠れません。貴方のことが好きで好きで死にそうです』

そつと裏面を見ると

「ひぎやあああああー！ 恐ええええええええー！」

なんだこれ！？ 手紙一面に“好き”と書かれていたとか……！
怖すぎる……！

「ホッキキス！ ジれ、なんなんだよ……！」

「僕にもさっぱりわからなによ…… でも何が凄いって、この手紙。
なんと立体視まで出来るんだよ……！」

「なんだって……？」

その手紙を凝視してみた。徐々に涙がこぼれて、ピントが合つて。すると

「うおおおおお…… すげえ…… 」「LOVE」つい浮かんできた
ぞ…… 3Dだ……

「どれだけ手が込んでるんだ……？」

「どうしよう、里美君……。里美君ならラブレター貰つたことがあ
るといつてんだけど……」「いやいや、こんなラブレター貰つたことなんてないぞ……！」

「こんなときつい感じしたらここのかな……？ やっぱり行つた方
がいいのかな……？」

「これどう見てもイタズラだつて…… 絶対行ひや駄目だ……」

対朱夏の仕業だよな……。

やういえば朝、朱夏も何か仕掛けるとか言つてたよな……。これ
のことだつたのか。

やう考えるとさつきの巡崎さんとのことも辻褄が合つ。
恐らく巡崎さんにも似たよなことをしたんだな……。

さて、これが作戦の一部であるなら、俺はこの手紙通りになるために行動しなければならない。

つまり俺はホツチキスを、午後7時に技術室へ誘導しなければならないってことか。

「頑張れ！ ホツチキス！ これはチャンスだ！ 絶対ものにしろよ！ 午後7時にここだよな！ なに、大丈夫さ！ 俺が言つんだから間違いない！！」

ああ、俺は今、嘘をついている……。
俺の顔は恐らく引きつった笑顔をしていることだろう。

「そうかなあ……相手の名前すらないし、好きついっぱい書いてるけど、僕そんなに好かれるような人間じゃないし……ひょっとしてイタズラなんじや……」

「そこ！？ いや、疑うところはそこじゃないでしょ！？ 他にもっとあるでしょ！？ 針とか針とか針とか！？」

絶対イタズラだよ！ いや、これはもはや脅迫の類ですよ！？

……と普通ならツツ「口」を入れるとこ。でも今はいつまでも言つしかない。

「心配するな！ 絶対、100%イタズラじゃないさ！… それに疑うのはラブレターをくれた相手に失礼だろ？」

「うわあ……、我ながら無茶苦茶な言い分……。

「そ、そうだよね！ 疑うなんて相手に失礼だよね！ 僕、7時ま

で、ここで聞いてみるよー。」

「ああ、ホツチキスの日が輝いてる……！ やっぱり嬉しかったんだろうなあ……。やべえ、罪悪感ばねえ……。」

「じゃ、じゃあ、7時までに心の準備してろよー。俺は少し席をはずすから。なあに、心配するなー。また戻ってくるからー。」

「あ、里美君！」

心がピュアなボクちゃんは、ホツチキスを騙すことに耐えられないと、朱夏にも訊きたいことがあるし。

俺は逃げるよーに技術室を去ったのだった。

……脇役つて辛いなあ……。

……これ、脇役関係あるつけ……？

第七話 ドジ キリ密着事件（後編）

「朱夏さんや。あれはなんドジでござませうへ。」

教室で優と談話していた朱夏に詰め寄る。

「あれ、つてなに？」

「とぼけるな！ あのラブレターだよ！ なんだあの内容は… 田立たないとこに惚れたとか何の冗談だ…？」

「仕方ないじやない！ ホツチキスのことって、あれくらいしか思い浮かばなかつたんだから！」

「他に褒めるところとかあるだろ？？」

「ガチで思い浮かばなかつたの…！ ジヤあ公太だつたらどんなこと書くの…？」

「そりや……、えーと……」

俺はしばらく考えてみたが

「 ないな

「でしょ？」

「可哀想なホツチキスだ…！ そつだ、中身だけじゃない！ なんだあの針！ 下手すれば怪我するぞ！？」

「それに一面”好き”つて書かれた手紙！ 怖すぎてちびりそつたぞ！」

「あれよ。今流行のヤンデレよ。なかなか来るものがあつたでしょ？ 立体視を表現するの、結構時間掛かつたんだから」

「余計なところに力を入れるなよ……」

なんかどつと疲れた気がする……。」いつをまともに相手にする精神が持たんぞ……。

「そういうえば巡崎さんはどうした？　お前巡崎さんにも何か仕掛けたる？」

「もちろん。彼女にも同じようなことをしたわ。7時に技術室に行くよつに仕向けたから安心して」

「後は優の作戦次第よ？　準備はどう？」

「ばっちりだ。カメラの準備も整ったし、いつでも中を覗けるよ」

優のノートパソコンには、技術室の映像が映し出されていた。

「お前は一体何者なんだよ……」

「いやね、幼いとき映画で見たスパイ映画に影響されてね。それ以来カメラを仕掛けることが趣味になつてるんだ」

「お前、いつか捕まるぞ……」

本当にこいつときたら…………まさか……！

背筋が凍つた気がした。もしかしてこいつ…………！

「お前まさか……俺の部屋にカメラなんて置いてないだろ？」

「ん？　もちろん仕掛てるけど？」

「しれつと叫うな！　つてことは、俺のプライベートを全て、こいつに見られてくるとこいつとかー？」

「早く外せよ！　なんで俺の部屋にまで！」

「なんでって言われても。僕と公太の間に隠し事はなしだろ？」

「お前の頭の中で、俺達は一体どんな関係になつてんだ！」

「そうムキになるなよ。誰にも見せないから」

「そういう問題じゃねーだろ！？」

「そんなことよりも、これ見てよ。ハハハハハ、ホツチキス、今か

ら何言うか練習しているよ！ これは面白い！

「ハハハハ、本当だ！ ホツチキスの奴、練習なのに声震えてるじ
やねーか！ ……って、話を逸らすな！」

「公太さ、ただの冗談を本氣にするなよ。恥ずかしいぞ？」

「公太、さつきからうるさい」

「やかましい！…」

はあ、はあ……。何故俺が悪いみたいになってるんだ……？

「そろそろ7時よ。二人とも、準備はいい？」

「あの作戦、本当にやるのか？」

「当然でしょ。上手く行けば二人の距離はよりいっそう縮まるし、
最低でも互いを意識するようになるわ」

「そりなんだけどさ」

「この作戦、正直気が引けるんだよね……。やうすぎって感じがす
るし……。

いや、そうじゃない。この程度、過去に優らとしてきたことと比
べたら対した事はない。だつたらこのモヤモヤ感は……。

認めたくないだけだ。そう、俺はつまり

「 嫉妬、してるんでしょ？ 公太」

「 何故それを――――！？」

朱夏は見透かされていた……。そう、朱夏の言つ通り

俺は嫉妬していたのだ。ホツチキスに。本来ならあそこへい
るべきは俺だったのだ。

巡崎さんのこととは諦めたつもりだった。事実、最近は色々とあってか巡崎さんへの想いは忘れていた。

でも、いざ作戦を開始するとなると心のどこかでストップバーが働いていたのだ。

「公太、あなた言つたよね？ 最高の脇役になるんだって。忘れたの？」

「忘れたわけじゃない。むしろ忘れられるわけない！！

朱夏の叱咤激励。あれは効いたんだ。俺はあの時決心したんだ。だから今だつて必死に耐えているんだ！

「忘れてねーよ！ 心配するな！ やるぞ！ 朱夏、優！」

俺の顔は少し引きつっていたかも知れない。でもこれが俺に出来る最大の意地だ！

そんな俺を見る一人の顔が、少し優しく見えたのは気のせいではないと思う。

午後7時。

日は落ち、構内は静寂を取り戻す頃。ついに技術室に巡崎さんが入ったのをカメラが確認した。

「さて、僕は行つてくるよ」

「ああ」

今回の作戦名”オナップ作戦 エピソード1 ドッキリ密室密着事件（後編）”（前編はいつあつたんだよ……）がついに開始される。

……もちろん名付けたのは朱夏だ。

作戦の内容、それは一人を技術室に閉じ込めるというものだ。ちなみにこの作戦の発案者は優。

「密室は、互いを意識させるのに最高の環境なんだよ……」

「確かに！ 私も体育倉庫に閉じ込められたい！」

「でしょ？ 公太も見てみなよ、ほら、このシーンなんだけど」

「いくら深夜枠アニメだからってやりすぎでしょう。ここだけ作画に力はいつてるし。濡れてもないのに足が艶やかだ！」

「体操マット……。新しいかも……！ 抱き枕から体操マットに

変わる日が近いかも！？」

「いいね、それ。ううむ。あきたり、王道とはいえ、もっぱり体育倉庫は外せないね」

「……体操服……。確か17着あるけど、新しいの買つちやおうかな……」

と、アニメで興奮しながら説明する優と朱夏の姿を思い出しだ。

……優ってそんなキャラだったか……？

つまり体育倉庫のような状況を、技術室で作り出すのが今回の作戦だ。
朝、俺達が仕掛けたのは密室を作り出す罠。カメラは今知つたけど。

これがまた大変な作業だつた。

何せ技術室は普通の教室と大した違いはないからだ。出口一つ抑えればよい体育倉庫とは訳が違う。

教室の前後の出入り口。それから窓。これらを全て同時に抑えなければならぬからだ。

教室の窓。実は朝から窓のレールに接着剤をたんまりと塗りこんでおいた。

「なあ、これが終わつたらどうするんだよ？」

「大丈夫。これ、水で溶けるから」

塗つてからだいぶ時間が経つてゐる。ちょっとやそつとな力じや動かないはずだ。

後は教室の出入口だが、一人が入つた後、つつかえ棒を立てる。これで密室の完成だ！

抜け穴があるとすれば窓ガラスだが、そこにも抜かりは無い。素手で割れるようなガラスじゃないし、部屋の工具は全て隠した。部屋の机は固定式だし、椅子は紐で机に縛つた。

技術室で授業の行われない今日という日を選び、このよつた大胆な手に及んだのだ！！

「ただいま」

つつかえ棒を立てに行つた優が帰つてきた。

「フフフ、これからだ……」

モニターには現在の一人の様子が鮮明に映し出されていた

技術室

「あ、あの……巡崎さん……？　ど、どうしたの？……忘れ物……？」

「……え！？　え、えっと、あのそ、うじやなくて……！　倉敷君こそどうしたの……？」

気まずい雰囲気が、二人を包み込んでいた。

「僕はその……何というか……。人を待っていたんだ……」「わ、私も……。ここで人と会つ約束があつて……」

「そ、そ、うな、んだ……」

「うん……」

一人は顔を俯かせ、無言のまま立ちすくんでいる。

教室

「……緊張が伝わってくるな……」

「……」

「ちくしょ、こ、こちまで汗ばんでくるぜ……・・・・・」

「……」

「ホッキキス、頑張れよ……！」

「あああああつ……！　もう……じれつたいわね……！」

モニターを覗きながら、朱夏が苛立っていた。といふが爆発した。

「いや、しょうがないだろ！ ホツチキスなんだから！」

「ホツチキスだからねえ。」そのままじゃ埒があかないね。そろそろあれを使いますかね」

優はそう言つとポケットからキラリと光るものを取り出した。

「なにそれ？」

「これはね……。学校のブレーカーを落として暗闇を作り出す秘密兵器さ。これを使つとしばしの間、停電状態になる。密室で暗闇。完璧な状況だらっ？」

血癪げに語る優。その手に持つものは……まさか…

「おこおこー、そりゃさすがに危ないって…！」

優が持つもの。それは

ピンセツトだつた！

「これをコンセントに刺せば、ショートして一気にブレーカーが落ちるよ……」 いくつか同時に刺せば復旧には時間が掛かるだろうね……。あ、ノーパソにはバッテリーがあるから心配しないでいいよ

「そつちの心配はしてねーよ…… おこ、朱夏も止めりよー」

「大丈夫よ。ゴム手袋持つてきてるから」

「ゴムが電気を通さないことくらい、公太だつて知つてるだろ？」
「もちろんー、なるほど。なら安心だ！ ……つて、そんなわけないだろ！？」

おかしい！ じつらの考え方は根本的に何かおかしい！

「数喰。配置について。」

二
了
解
！

止める!! ハンセン病が壊れる!!

俺の警告など聞こえていないかの如く、一人はピンセットを持ち

朱夏 & 優『ていや――――――――――――――』

躊躇にならずペンセットをペンセントに刺し込んだのだった！－

公太君の告白をぱたつさつと切り捨てた私。

最近、なんである時断つたのだろうと疑問に思ひことがある。

「公太君のこと、確かに好き、だつた。……うん。好き……”だつた”……」

口に出してみると案外すんなりと解決した。

そう、好き”だつた”。

あの告白を受ける瞬間までは。

冷やかし混じつの送り出し。屋上までの階段。ドアを開けて公太君を見つけて。

これから彼が何をするつもりなのか、もちろん分かっていた。それに対しても返事をするのかも、決めていた。

なのに。

告白を聞いた瞬間。

あなたじゃないの

自然に出た言葉。

彼への気持ち。全てが過去のものになつた。

「なんで、なんだろうな……」

私自身、よく分からなかつた。
彼のことは好きだつた。本当に。
でも断つた。私から。
よく分からない。
でも、これだけは悟つた。

彼じゃないって

公太君には本当に申し訳ないと思つ。
期待させるような素振り、表情、行動、全てをとつてきた。
彼の期待には嬉しかつた。私だつて彼のことが好きだつたんだから。
でも、私が全てを壊した。裏切つた。

「でも……私は悪くない、よね……？」

後悔はない。私は気持ちに正直になつただけ。だから私は悪くない。

でも、申し訳ない。謝罪したいとさえ感じる。

悪くないけど、謝りたい

私は、こんな矛盾する気持ちを抱えたまま、一〇の数日を過ごして
きた。

今日だって”一〇の数日”のうちの一 日なんだ、って考えながら校
舎に入つて

下駄箱のふたを開けた。

はりつ。

下駄箱から見覚えの無い便箋があつた。

「なんだらう……？」
……………「れつて…………ラブレター…………！？」

飾り気のない便箋

『美都さんへ』とだけ書かれている。差出人の名は……ない。内容は、とても誠実で、それでいて気持ちが籠っているのが分かる文体。

「なんで私なんかに……」

私は先週、告白を断つたばかり。

そもそも、誰もが認めるほど仲が良いと噂になっていた相手を、大した理由もなしに、いとも簡単に振った女。

それが私のいい噂になつていると考へにくい。

そんな私にラブレター……?

「ねせやー、みつちー、」

……びっくりした！ 突然背後から抱きつかれたのだから！

「お、おはよう、朱夏さん……！」

「どうしたの？ 今日はなんかそわそわしてない？」

「そ、そんなことないよ……？ 急に抱きつかれたからびっくりしただけ」

ヒツヤリラブレターを隠し、体裁を整つた。

「朱夏さんはいつも早いね！ 神社ってやっぱり朝早く起きるの？」

するつと世間話を割り込ませ、いつもと同じ私を演じる。

「神社はあまり関係ないんだ。ただ今はやる」とがってね

「へえ、大変だねえ」

「そんなことないよ？ とても楽しいし……！」

「楽しいんだ。いいなあ」

……いつもの私、だよね。

「ねえねえ、みつちー」

「なに？」

「顔、ちょっと赤いよ？ 愉快な」とでもあった？

「えつー？」

私の顔が赤い……？

「しかもなんだか嬉しそう。もしかして……ラブレターとか貰つちゃったとか？」

「え、そ、そんなこと…………！」

朱夏さんは時々とても鋭いときがある。でもよつこよつて今じやなくとも……！

あ、慌てず、慎重に言葉を返さないと

「違うよ、あのね

「良かつたね、みつちー！　じゃあ、私先に行ってるからねー！」

良かつたね

そう言われたとき、気がついた。

嬉しい。私は嬉しいと思っている、と。

好きだった人にとっても酷いことをした。そんな私を好きになってくれた人がいたことが、とても嬉しく感じられた。

誰が出したのかも分からぬ、ラブレター。普段なら怖いとさえ思つ。

でも今は 少し暖かい

『今日の7時。技術室でお待ちしています』

「うそ……。私もすぐ行くから……絶対行くから……！」

前半は台詞は朱夏さんに。

後半は 誰かも分からない、その誰かに

第八話 閉じ込められた主人公／実況を楽しむ脇役（前書き）

優 「さあ、ついに始まりましたよ？」

朱夏 「始まりましたねー。その名も……！」

朱夏＆優『”朱夏＆エリートのよく分かる実況「コーナー”』

公太「何やつてんだ、お前……」

優 「さあ委員長。公太にこの「コーナー」の趣旨を教えてあげて！」

朱夏 「仕方ないなあ！ でも特別に教えてあげましょう！」

公太「いや、別にいいけど」

朱夏 「仕方ない！ 特別に教えてあげましょう！！！」（チラツ）

公太「いや、だから別に……」

朱夏 「教えてあげましょう……！」（ギロツ）

公太「……お願いします……」

朱夏「この「コーナー」では主人公視点と脇役視点が同時に進行する場合！」

優 「読者がより分かりやすく進められるように！」

朱夏「脇役サイド側を実況解説風にして進行するといつものです！」

公太「……お前ら、誰に向かつて説明してんだ？」

朱夏「今回の場合、主人公であるホツチキス視点と！」

優 「”元”主人公、”現”脇役である公太視点が同時に進行します！」

朱夏「したがつて描写によつては、どちらの視点が分からぬ場面が出てくるので！」

優 「それを脇役サイドを実況形式にして、視点混乱を避けることを目的とした「コーナー」なのです！」

朱夏「判り易くするために、各セリフにはキャラ名がついてあります」

優「『』の中は実況側、『』の中は主人公となつております！！」

朱夏「現主人公『ホツチキス』視点で話は進み！」

優「現脇役『公太』&その他二人視点で実況、という形になります！」

公太「あまり”現”脇役とか言わないでいただけません！？」

第八話 閉じ込められた主人公／実況を楽しむ脇役

朱夏『それではモニターに写った一人のことは…』

優『私、実況解説の和久井優と！』

朱夏『同じく実況解説の縁朱夏がお送りします！…』

公太『…』

啓（……………あの手紙の主って、巡崎さんなのかな
……………？）

僕は言葉に詰まっていた。

約束の7時。現れたのはなんと巡崎さん。

先日まで公太君と仲がよかつたはず。

噂によると公太君の告白を断つたって聞いたんだけど。

啓（もしかして、告白を断つた理由って、僕のことが好きだから…？）

待つて、早まらない方がいい。

彼女は人を待つているって言つてた。もしかしたら別の用件があるのかもしれない。

啓（どうしよう……でもこのままつてのも良くないよね……。よし、聞いてみよう……。ビックリしそう話さないと分からんんだ……）

啓&美都『あの……………』

プツツ！

美都一キヤツ！！

突然、部屋が真っ暗になつた！

朱夏『おおつと！ 一人が口を開いた瞬間を狙うかの如く停電が発生しました！！』

『素晴らしい夕べだ
たとこひでじょうか？』

『…………お前ら樂しみすぎだ…………』
『…………そろそろ暗視スコープ機能充…………』

公太『そんな機能まであるの！？』

朱夏『お、見える見える』

美都「な、なんなの？ 停電？」
啓「うん……。びっくりしたあ……」「

朱夏『おひが、みつぢーは驚いて『元餅をひいてーる!!』

『これはもしかしたらパンツが見えるかも！？』

公文書のシナリオを書く
ために必要な知識

啓
「だ、大丈夫?
ほら、手、捕まつてよ」

僕は尻餅をついている巡査さんに手を差し出した。

美都「あ、ありがと…」
啓「どういたしまして」

……………あ……………。

僕、生まれて初めて女の子と手を繋いだかも……………。
小さくて、とても柔らかかった……………。
……………つて、こんなときには何考えてるんだろ、僕。
繋いだ手を引っ張り、彼女を立ち上げた。

優『おおっと、ホッチキスから手を差し伸べましたよ？ これ
は一体どういうことなのでしょうか？ 解説の朱夏さん？』
朱夏『おそらくホッチキスの男としての見栄でしょうね。ましてや
相手はラブレターをくれた相手かも知れない。少しでも男氣を見せ
たい』

朱夏『そう思うのは男として当然というでしょうね。いやあ、その
心意氣、分かりますねえ。私にも覚えがあります』

公太『なんで朱夏が男の気持ちを知っているんだよ……………』

美都「いたいっ…」

巡崎さんが立ち上がったとき、彼女は痛みを訴えた。

啓「どうしたの！？ どこか痛んだの！？」

美都「ごめんなさい……………。少し足をひねっちゃったみたい……………」

朱夏『す、素晴らしい！！ なんてベタな展開！…』

公太『おい、これまずいだろ！？ 助けに行かないと…』

朱夏『ダメ。』『は主人公に任せるとひるよ。脇役がでしゃばっちやいけない』

公太『……………そつか……………』

啓「大丈夫！？ 今すぐ保健室へ行こう。まだ先生もいるだろうし……。歩ける！？」

美都「……………大丈夫、歩ける、よ……………あつ……………」

啓「無理しちゃダメだよ……………」

ひねつた足を前に出す度、巡崎さんの顔は苦痛で歪んだ。巡崎さんは強がっているけど、歩くのはとても無理だ……！ 僕はどうしたらいい……………？ そんなの決まっている！

啓「……………僕が巡崎さんを背負つよ……………！ だから無理しないで！」

恥ずかしいけど、今はそれどころじゃない！

公太『何だと！？ ホツチキスの奴、いつの間にそんな大胆なことが出来るようになつたんだ！？』

朱夏『主人公補正といったところかしらね。ホツチキス、やるじゃない』

優『つまり巡崎のおっぱいがホツチキスの背中に当たると……』

ことだね

公太『なんですよ！？』

啓「ほり、ゆづくつと乗つて……………！」

美都「うん……。ありがとう、『めんね、倉敷君……』」

啓「気にしないでよ。困ったときはお互い様だから」

公太『羨ましい 羨ましいぞ！！』

朱夏『そんなにおっぱいがいいの？ 仕方ない。なら私が乗つてあげるわ。全く公太つたら、エッチなんだから……』

公太『やかましい！ そういうことじやないわい！ それに妙に艶っぽく言つな！』

お前にはあまりおっぱいないだろ！……つてことは黙つておひづ。

公太『…………ホントお前はすぐに殴るのな…………』

朱夏『失礼しちゃうわね。まだ発展途上なのよ！……』

公太『なぜ思考が読めた！？』

朱夏『おっぱいの話題が出る度に、いつもそう言われてきたからよ！ 文句ある！？』

公太『…………ありません』

……朱夏つて、やつぱり苦労してんだな……。

啓「しつかりとつかまつてね……」

美都「…………うん」

優『おつと！ 二人は戸惑いながらも無事に合体！！』

公太『その表現は適切ではありませんよ！？』

朱夏『そしてそのまま扉に向かいます が！！』

急いで保健室へ行かないと……！
僕は部屋の扉に手を掛けた。けれど。

啓 「あ、あれ？」

美都 「どうしたの？ 倉敷君……？」

啓 「扉が開かないんだ……」

優 『大成功……！』

朱夏 『完全に密室！！ ひやつほーい！！』

公太 『どうしてそんなにテンションが高いんだよ……』

優 『それはもちろん！』

朱夏 『楽しいからよ！！』

公太 『聞いた俺が馬鹿だったよ……』

啓 「巡崎さん、ちょっと待つって！」

僕は巡崎さんを降ろし、部屋を調べて回った。

啓 「ダメだ！ 前も後ろも開かない！」

そうだ、窓！ 窓からなら出られるかも……！

優 『フフフフ……もちろん窓も……！』

朱夏 『開かないんですね！』

啓 「窓も開かない！？」

美都 「もしかして私たち 閉じ込められた、のかな……」

啓 「そんな 一体どうして……？」

美都 「…………私のせ……」

優 『おお！ なんといつ絶望ムードー。』

朱夏 『…………お前らは本当に幸セムーデー一杯だよね…………』

啓 「そつだ、何か窓を割る道具とかないかな…………？」

美都 「…………」

…………びついたんだる…………。さつきから難しい顔をしている巡崎さん…………。

啓 「…………えと……、足、大丈夫…………？」

美都 「…………え、うん…………！…………大丈夫だよ！ 道具、探さないと！」

啓 「う、うん！ 確かここに道具箱があつたはず…………」

彼女の態度の変容に少し戸惑いつつ、僕は道具箱を探し始めた。

啓 「見つけた！ 確かこの中にトンカチとか入つていたはず…………！」

優 『ところがどつこい！』

朱夏 『入つていらないんです！ 空っぽです！ これが現実…………！ さあ、お引取りを…………！』

公太『一条……』

啓 「道具がない……となると……椅子を使おう」

美都「椅子は危ないよ！」

啓 「僕は大丈夫だよ……それよりも巡崎さんの足の方が心配だから！」

美都「倉敷君……」

公太『あれ？ 巡崎さん、今ちょっとホッキキスにときめいてなかつたか？』

朱夏『…………ときめいていたわね…………。縁の糸も少し太くなつたみたいだし……』

優『いい傾向だね。でも、そう簡単に脱出はさせないよ？ 無論椅子にも！』

啓 「ああっ！？ 椅子、机に縛られてる！？ くそ、なんて硬く結んであるんだ！……」

優『いやあ、ここまで完璧に腰に掛かってくれるなんて、仕掛けた側としては清清しいですね！』

朱夏『そうですねー！ まるでホッキキスがアホな子みたいですしー！』

公太『……すまん、一人とも……。もうじき助けにいくからな……』

啓 「ちくしょう、椅子まで動かないなんて！ これじゃあ巡崎

さんが……」

美都「もういいよ。倉敷君」

啓「え？」

美都「もういいよ。私は大丈夫。痛みも引いてきたし、少し休めば歩けるようになるから！」

美都「それには。少し待つてればきっと助けがくるよ！だから、ね！」

啓「うん。……そうだね……」

少し待つていれば。

そうだ。里美君は言つてた。必ず戻つてくるつて。それを思い出すとどつと安心した。

それと同時に歯がゆかつた。こんな大変なときに、何も出来なかつた自分自身に。

啓「僕、情けないよ……」

美都「……どうして……？」

啓「だつてさ、クラスには全く馴染めてないし、友達だつていなさいし……。いつも勇気を出せなくて声を掛けたくても、何も出来ないんだ」

啓「そしてこんな時だつて、何も出来ない……。僕、本当に良いところがないよ……」

ははつ、とつこ空笑い。ああ、なんて情けないんだ。そのとき

美都「そんなことないよ！」

そんな僕を見て、巡崎さんが叫んだ。

美都「そんなことない！ 私、倉敷君の良いところ、たくさん知つ

たよー！」

啓 「そんなところ、ないよ……」

美都 「いいから黙つて！ 倉敷君は良いところをたくさん持つてゐる！」

美都 「現に今、私を心配してくれてるでしょー！？」

美都 「足ひねつたからって、私をおぶつてくれたじゃないー！ 私の足を気遣つて！」

美都 「倉敷君は情けないんじやない！」

優しいんだよー？

啓 「やさ……しい……？」

僕、そんなこと初めて言われたよ……。僕が優しい……？

美都 「そつ。倉敷君は優しい。それが倉敷君の良いところ！ だから良いところが何も無いなんて言わない！！」

啓 「巡崎さん…………うん…………ありがとう…………」

美都 （それに今回の手紙だつて……、ずいぶん救われたんだから……）

美都 「それにクラスに友達がいらないなんて嘘だよ！ だつて、いるじゃない！ 私とか委員長さんとか！」

美都 「他にも和久井君とか、さ……里美君だつて……！ 7班みんな、倉敷君の友達だよ！？」

朱夏『ううつ！ イイハナシダナー！！』

公太『青春だ…………！！』

朱夏『そつだ、そつだよ。友達だよ…………。あれ…………？ 目から鼻汁が…………』

公太『なんて感動話なんだ！ 僕、これが映画なら3回は見に行くよー！』

優『そつか、僕つてホツチキスの友達だつたのか…………。初めて知つたよ』

公太『エリート君のバカタレ！！』
7班はみんな親友なんだよ！！

昔から決まつていたんだよ！！』

朱夏『 そうよ、 ここのバカ！ ！ 空氣読みなさいよ！ ！ 』

「公太、いーや、わかつてないね！」 親友なんだよ！」

朱夏『そうよ！ 親友よ！』

優 ^{ゆう} わかつた、わかつた

委員長！ 鼻水汚い！！！

朱夏『……あんたらつて本当に気持ち悪いわね……』

公太『……ボクにそっちの気はありませんよ?』

啓 友達……僕は友達

美都「倉敷君 嬉しそうで

卷之三

太と委員長がいない…………？

「あ、モニターに公太が

美都「委員長さん！？」

俺と朱夏は我慢が出来なくなり、急いで一人の元へ駆けつけ、そ

して

公太「俺達友達だもんな！ 心配したぜ！ つわ～ん！！」

朱夏「うう……！ そうよお！ 友達よお！」

啓「ちょ、ちょっと！ 一人ともー？ 急にどうしたの！？

く、苦しいよ……ー！」

と俺達は友情を確かめ合つたのだった。

優『むせくるしきどね』

第八話 閉じ込められた主人公／実況を楽しむ脇役（後書き）

少しゲーム形式のようになってしましました。

読み辛かつたらすみませんでした。

主人公、脇役の両者視点を同時に進める描[写]は勉強中ですので
どんどん悪いところは指摘してくださいね！
よろしくお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7768y/>

俺こそが名脇役！

2011年12月1日16時57分発行